

キーツ・肺病・ロマン主義

――結核の比較文化史――

福田 眞人

構成

- 一、はじめに
- 二、死とそのイメージの変化
- 三、キーツと肺病

一、はじめに

歴史の中で数多く見られる病気の中で、人々の禁忌や恐怖の対象となったものが少なくない。たとえば、さまざまな文化を通して嫌悪や禁忌の対象であった癩病（ハンセン氏病、leprosy, Hansen's Disease）や、多くの急性の患者を出したコレラ（cholera）、さらにはヨーロッパにおいて、あるいは中国においてその死者の多さのために何千という村落を崩壊させたペスト（plague）は、人間に何か礼讃や憧憬に似たものを抱かせることはなかった。つまり、

病気がもたらした死やそれに付随する被害が、あるがままに、あるいは負のイメージを増幅して人々の気持ちに受け止められられたのである。

しかし、奇妙なことに、歴史上のある時期、ルネッサンス期のイタリアやフランスで死病であった梅毒は、ある種のダンディズムの発露と認められていたし、また十九世紀から二十世紀にかけて、おそらくは西ヨーロッパと日本で肺病（肺結核）がその恐しい猖獗にもかかわらず何らかのロマンティックな夢を人々に抱かせた疑いがある。梅毒はさておき、多くの若者を死に追いやったり、また日常生活から分断した肺病が、なぜ、どのようにして、禁忌や嫌悪の対象であったと共に、憧れや礼讃の対象となったのか、その不分明のまま放置されてきた部分に対する合理的な説明の試みは、従来、十分に行われていない。

本論文では、肺病のいわばロマン化過程を、単にロマン主義といわれた時代のみを求めるのではなく、長い歴史の中で別個に培わ

れていた死や芸術や天才に関する独特の連想が、いかに肺病を手掛りにしてひとつに結びつけられ、夭折（ようせつ）（早世、若死）が天才と芸術の根源であるように思いなされるに至ったかを見る。

なお、この論文であえて現代の一般呼称「結核」を用いず「肺病」を用いるのは、ここで論じられている時代、英国では今日用いられる「tuberculosis」のかわりになお「consumption, decline, wasting disease」が一般に用いられていたことに対応しようとする意図があることによる。（前者は一八三六年、スイス人 Schöten の命名による。）

二、死とそのイメージの変化

ぬるま湯の中に一人の女が横たわっていた。彼女は、心ゆくまで風呂を楽しんでいたのではなかった。一日何時間も、裸どころか銀の刺繍をほどこした豪華な古代衣裳をまとい、画家の絵筆がその姿を写し取っている間じいつとしていたのだった。

今しも英国の画家ミレー (John Everett Millais, 1829-1896) はシェークスピアの『ハムレット』にその題材を求めて、「オフエーリア」(一八五二—三)の絵を制作中であった。毒殺された父王の復讐のために狂気を装うハムレットの気が知れなくなった恋人オフェーリアが、川の岸辺で花を摘もうとして足をすべらし水

死するという悲劇的なエピソードである。水没する直前、衣服は川面に大きく花開き、手に摘んだ花が一つまたひとつとこぼれ落ちていく中を、彼女は哀しく歌うのである。しかしその虚ろに見開かれた眼や、蒼ざめた頬は絵の中のものだけでなく、実際このモデルをつとめたエリザベス・シッダル (Elizabeth Eleanor Siddal, 1829-1862) 自身の悲劇的な身体状況をも反映していた。彼女はロンドンの帽子店で働いているところを見出されたのだったが、すでに少女時代に肺病にかかっていたらしく、脊椎は曲がり憂鬱に苦しめられていた。⁽¹⁾

シッダルは常に物憂げな表情をし、微熱のため蒼白い頬にうすら紅味を帯びていたために、恋人ロセッティ (Dante Gabriel Rossetti, 1825-1882) の創作意欲をかき立てたようである。その容貌は「眼は青く、瑪瑙色で、卵のかたちをしていて、むしろ東洋風、蒼白くてちかちかしない。まるで黄色い岸辺に潮で残され、上の青空をものうく反映している水溜りのよう」だったとも「かの女の色つやは透明で、顔色に隈があつて非常に紅く、不吉にも微妙な健康状態を暗示していた⁽²⁾」とも描写された。彼女は、止まない咳にも悩んでいたのだった。

シッダルの肺病は悪化し、二人は貧しかった事などもあつてすくには結婚できなかった。彼女を気に入っていたラスキン (John Ruskin, 1819-1900) は経済的援助を与えて、南仏やアルジェリ

アに転地保養させたが、彼自身もオックスフォード大学で誉高いニューディゲイト賞(Newdigate Prize)を取った翌年の一八四〇年に咯血して、南イタリアに転地療養した結果健康を回復した経験があった。⁵³⁾

ロセッティとシッダルは一八六〇年結婚したが、その時の彼女はもう毎日が死に瀕した状態だった。それから妊娠、死産という不幸を経て、一八六二年二月に彼女は神経痛の痛み止め(肺病の薬でもあった)の阿片チンキ(Taudannin)を呑み過ぎて死んだ。ロセッティは悲しみの表現として彼の自筆の詩稿を遺骸と共に埋葬した。⁵⁴⁾

一方ウィリアム・モリス(William Morris, 1834-1896)の妻になったジェイン・バーデン(Jane Burden)もまた肺病やみで、南仏に保養に出かけていた。彼女の美しさはロセッティの絵筆によって不滅にされたが、ヘンリー・ジェイムズ(Henry James, 1843-1916)やバーナード・ショー(George Bernard Shaw, 1856-1950)も彼女の美しさを賞めそやし、その形容には「異様な、鉛色の、細く長身、物静かな」といった表現が使われた。

こうした背が高く瘦身で、長い首、長い手足、大きな眼、官能的な口許を持ち、その姿態から憂愁が漂うこと——この十九世紀に形成された美人のイメージは、現在もなお西欧社会に、そして日本で根強く生きているのではないのか。⁵⁵⁾

しかしこうした美人像は十九世紀独特のものではなかったのだろう。確かにロセッティやモリス、ミレー達が結集して作ったラファエロ前派⁵⁶⁾(Pre-Raphaelite Brotherhood)の人々が理想としたルネッサンス・フィレンツェの花シモネッタ・ヴェスプッチがわずか二十三歳で急性の肺病に倒れ、いまたその理想の再来と言われたエリザベス・シッダルが同じ病いに若くして逝った事は興味深い。

奇しくも、この運動の機縁となったのは、一八一八年の初め賑やかな生活をロンドンで楽しんだ詩人のキーツ(John Keats, 1795-1821)が心を寄せたルネッサンス初期のジオット派の版画の名作が、後に偶然青年画家ハント(William Holman Hunt, 1827-1910)の眼に止まり、彼に強い衝撃を与えたためだった。⁵⁷⁾

さて、四百年の時空を越えて、美の理想型が一致したこと、そしてその理想の原型ともなった二人の女性が共に肺病に倒れたことは記憶されてよいが、しかしこの四百年間、美の理想——とりわけ女性の——が同じであったとは言い切れない。たとえばルーベンス(Peter P. Rubens, 1577-1640)やレンブラント(Rembrandt van Rijn, 1606-1669)、ブーシエ(Francis Boucher, 1703-1770)の澆測として健康的な女性美を思い起こしてみるとよい。

ところが十八世紀末頃から、健康であることよりもむしろ不健康であること、病的であることが美しいという考えが広く行きわ

たりはじめた。例えば、恋人同志の食事の際には食物に無関心を示すこと、また男達の間ではもの憂げな気の抜けたような女性に對して情熱を燃やすことが流行しはじめていたのだ⁽⁹⁾。その上、死に對する異常なほどの情熱もたかまっていた。死者を埋葬することの意味や、葬儀の仕方、墓の作り方までが事細かに論じられ、墓石に彫る墓碑銘(epitaph)がさまざまな死をめぐって書かれた散文や詩から採られた。

しかし、十八世紀に初めて「死」が存在したわけではないし、すでに太古の時代から、人は必ず死ぬものであったし、それはごく日常的なものであったはずである。中世には、ホイジンガ(Johan Huizinga, 1872-1945)がその著書『中世の秋』(*Herfst der Middeleeuwen*, 1919)の中で書いたように、「十五世紀という時代におけるほど、人びとの心に死の思想が重くのしかぶさり、強烈な印象を与え続けた時代はなかった。『死を想え』(memento mori)の叫びが、生のあらゆる局面に、とぎれることなくひびきわたっていた⁽¹⁰⁾」のだ。そして骸骨が踊り狂う「死の舞踏」(*danse macabre*)の図がヨーロッパ中に普及することになる⁽¹¹⁾。

そうした長い死の伝統の上に、十八世紀以降の死生観が立脚していたことは疑いがないだろう。しかし、すでに述べたような、死、とりわけ夭折(早世)が称讃され、やがてそれに至る蒼白く痩せていることが人々の趣味となり、果ては天才こそ早く死ぬと

いう神話が人々の間で信じられるようになるには、肺病の力がすぐれて与っていたと考えられる。ちょうどその時代が、革命の時代、ロマン主義(Romanticism)の時代と呼ばれている時期にあたる。ここではその時代の幾多の興味深い社会的変動や、文学思想の流れを、肺病という視点から捉え直してみることにする。

清教徒革命、ロンドン大疫病、ロンドン大火、名誉革命と引き続く動乱、災害に満ちた十七世紀が終りを告げた時、世は古典主義(Classicism)の全盛期だったが、その裏で静かに新しい時代を予想させる動きが生じていた。

それはトムソン(James Thomson, 1700-1748)が無韻詩(Blank verse)を駆使した『四季』(*The Seasons*, 1726-30)においてそれまで閑却されていた自然描写を試みた点で先駆者であったのかもしれない。それ以前すでにアン・フィンチ(Anne Finch, Countess of Winchelsea, 1661-1720)による『夜の瞑想』(*A Nocturnal Reverie*, 1713)、続いてバーネル(Thomas Parnell, 1679-1718)の『死に関する夜の一篇』(*A night-Piece on Death*, 1721)が出つて、夜の趣味の傾向を示した⁽¹²⁾。

バーネルは「埋葬派」あるいは「墓場派」(Funeral School or Sepulchral School, Graveyard School)の先駆を成したが、トムソンの軽快な時代精神とは対照的に、夜陰および死滅に對する傾向を示し、やがてそれはヤング(Edward Young, 1683-1765)の『夜

の想』(Night Thoughts, 1742:5)に受け継がれた。

ヤングは一七三一年エリザベス夫人と結婚したが、彼女の前夫の娘テンブル婦人は、一七三六年フランスのリヨンで肺病のため死んだ。続いてテンブルは一七四〇年、エリザベス夫人は翌年に死んでいる。こうした連続した哀しみが『夜の想』の執筆の動機となったと言つてよいだろう。

この詩集はフランス、ドイツ、イタリア、スペイン、ポルトガル、スウェーデン、マジヤールの各国語に訳され、とりわけ独仏両国のロマン主義文学者たちに深い影響を与えた。

「墓場派」そのものの題名を持った『墓』(The Grave, 1743)がブレア(Robert Blair, 1699-1746)によつて書かれ、ハーヴェイ(Rev. James Hervey, 1714-58)の『墓場への瞑想』(Meditations among the Tombs, 1746)・ Collins(William Collins, 1721-1759)によつて『夕日に寄せる頌歌』(Ode to Evening, 1748)が書かれ、やがてグレイ(Thomas Gray, 1716-1771)による『田舎の墓地にて詠まれし哀歌』(An Elegy Written in a Country Churchyard, 1751)が英国のみならずヨーロッパ全体に愛誦されることになる。⁽¹⁰⁾世は次第に「理性の時代」から感覚・情熱の時代へと変化していった。もしロマン主義の主要な要素として「情熱」(passion)を数えるならば、ヒューム(David Hume, 1711-1776)はすでにその主著『人性論』(A Treatise of Human Nature, 1739)の中で「理

性はさまざまな情熱の奴隷であるし、そうでなければならぬ、そしてそれらに仕え従う以外のいかなる役目を装うこともできない」と述べていて、情熱が理性を凌駕したことをはっきりと告げている。

ロマン主義の復活にもっとも大きな影響を与えたのは、パーシィ(Thomas Percy, 1729-1811)の編集による『古謡拾遺集』(Reliques of Ancient English Poetry, 1765)とチャタートン(Thomas Chatterton, 1752-70)による『ローリー詩集』(Rowley Poems, 1765, 1778, 1782)だった。⁽¹¹⁾

チャタートンは教師であった父の死後生まれた子供で、兄はすでに幼時に死亡していた。彼は幼児期から恍惚状態になると何時間も座ったままで、やがて突然泣き始めたり、また食事も睡眠もまったく摂らないことがあった。彼は中世英語の綴りや韻律を独習し、トーマス・ローリー(Thomas Rowley)という架空の人物の筆による詩篇を思い立った。それは一七六五年、彼が十三歳の時の事だった。

この早熟の天才は、しかし周囲の人々との軋轢を生じ、ずっと後にワーズワースが書いたように

私はあの驚異の少年チャタートンのことを思った
あの限りのない魂は彼の驕りの内に滅んだ

自分の好みに従って山沿いに

栄光と歓喜の中を歩いていた彼を思う

われわれは自分の精神によって神としてあがめられる

われわれ詩人は若い時喜びの中に始め

やがて失意と狂気へと至る⁽¹¹⁾

「失意と狂気へと至る」べき運命が待っていた。彼は無一文になり、餓死は目前に迫っていたが、最後まで矜持を捨てる事はなかった。チャタートンは薬商の店に寄り鼠駆除の口実で劇薬砒素^{ヒソ}を買って帰ると、屋根裏の自室で十八歳にもならないその口で決然とその毒を呻った。彼の死体が翌日発見された時、身の廻りには彼が破り捨てた詩の原稿が散乱していた⁽¹²⁾。その死の床に横たわる姿を、ラファエロ前派の画家ウォリス (Henry Wallis, 1830-1916) が『チャタートン』(Chatterton, 1855-6)と題して描いたが、それはチャタートンの死の直後、当時のジャーナリズムはまったく彼を無視してかかったのに、次第にロマン主義詩人達の憧憬の対象となり、夭折の天才としての令名が高まった事情を反映していた⁽¹³⁾。

中世への憧憬を詩句に託したこの早熟の天才は、自殺という方法によってではあったが、すでに病的な傾向の内に夭折したことは、多くの芸術家に深い影響を与えたのだった。コールリッジ

(Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) は十六歳の時、その夭折を悼む詩『チャタートンの死への哀悼詩』(Monody on the Death of Chatterton, 1788)⁽¹⁴⁾を書いたが、それから彼の死の年一八三四年まで四十六年にわたって書き加え続けられた事実からも、どれほど深く彼がチャタートンに傾倒していたかがわかる。ワーズワースの詩句の一部を、すでに引用したが、彼もチャタートンの作品に深い理解を示していたという。またロセッティは彼に寄せるソネットを書いて、彼こそ英詩人中誰にも劣らぬ詩人であると称讃している⁽¹⁵⁾。

早熟の天才が若くして死ぬ。その死後には数多くの傑作が残され、それらが人々に深い感動と印象を与える——ロマン主義作家達の「存在理由」を問われた時、きつとこうした答えも有力な意味をもったに違いないように思われる。しかし、こうした考え方は十八世紀から十九世紀初頭に特有のものではなかった。ギリシヤ時代にすでに、「神が愛する人は若く死す⁽¹⁶⁾」ということが言われていて、それはつまり、神々が愛するほどの才能を持ったものは早死にするというものである。そして、荒々しい情熱と言ったものが、その生活全体を覆っていたのは、一人チャタートンのみではなかった。バイロンやシェリー、キーツ達も、その短く輝かしい生を燃え尽きたのだった。

彼らの人生が「革命的」であったことは、まさに世界が「革命」

的な事件に満ちていた事と無関係でなかったのかも知れない。七年戦争（一七五六―一七六三年）からアメリカ独立革命（一七七五）、フランス革命（一七八九）とそれに引き続くナポレオンの活躍は、国や身分に関係なく人々の血を滾らせたに違いなかった。実際、ワーズワースは自らパリに赴いて革命軍に共鳴したし、コールリッジも革命の成功を熱望していたのだった。

そして、そんな情熱に燃えた彼らが、ちょうど世の中で若者達が肺病で次々と倒れるように死んでいった時、いつの間にかこの病に罹って若死にすることが天才の条件のように考えられ始めた。つまり、病気と才能と夭折が三位一体となってひとつの時代を画するかに見えた時、ロマン主義はその最盛期を迎えていたのである。

そしてちょうどこの時期に、フランスで特異な精神の傾向、「世紀病」(Mal du siècle)が若者を冒し始めていた。それは感受性の強い、現実を嫌悪する、憂鬱な厭世的気分⁽¹⁷⁾で、やがてドイツ、英国にも同じ雰囲気⁽¹⁷⁾が充満するようになっていった。

こうした時代に生き、才能に恵まれて詩を歌い、やがて若くして肺病に倒れたキーツ(John Keats, 1795-1821)は、十九世紀初頭の英国の肺病に関する豊富な資料をわれわれに提供してくれている。彼の残した数多くの手紙と詩、また友人達の手記を通して、当時肺病がどのように人々に捉えられ、いかなる治療が施された

のか、また彼の周囲の人々の度重なる死⁽¹⁸⁾が示すいわゆる家庭内感染の問題や、北欧で信じられていた肺病遺伝説と南欧で根強かつた伝染説の対比の妙、さらに肺病という病がロマン派詩人キーツの詩の中⁽¹⁹⁾にどのように描かれどのように響きわたっているかを探ってみることにする。

三、キーツと肺病

キーツは、一七九五年一〇月三十一日、ロンドン旧市内(the City)北部フィンズベリー・ペイヴメント(Finsbury Pavement)で貸馬屋の主人トーマス(Thomas)とその妻フランシス(Frances)の長男として生れた⁽²⁰⁾。兄弟には次男ジョージ(George, 1797-1842)・三男トーマス(Thomas, 愛称 Tom, 1799-1818)・妹フランシス・メアリー(Frances Mary, 1799-1818)・四男エドワード(Edward, 1801-1802)がいた。この間に、キーツの母方の若い叔父の一人トーマス(Thomas Jennings, 1782-1796)は一七九六年の夏に、肺病(decline)のために十四歳で亡くなっていた。

恐らくキーツ家の不幸は一八〇二年に四男エドワードを亡くした事、および一八〇四年父が落馬して死んだ事から始まった。母は再婚したが、またすぐ戻ってきて家族と共に暮した。エンフィールド(Enfield)における彼の少年時代は、彼自身の回想の詩の

中に鮮やかに描かれている。

腕白な少年がいた

彼は腕白な少年だった

彼は家には居つかず

彼は静かにできなかつた

There was a naughty Boy

A naughty boy was he

He would not stop at home

He could not quiet be . . .

実際、彼はボクシング、乗馬、水泳、クリケット、ボートに興じるスポーツ万能の少年だった。しかし、彼の周囲では死の影が少しずつ濃くなっていった。一八〇七年には母方のもう一人の叔父ミッドレー・ジョン (Midgley John Jennings, 1777-1808) が咯血し、翌年に死んだ。その頃から母のフランシスも病気がちになり、弟のジョージは曖昧にそれを「リユーマチ (rheumatism) と呼んでいた。キーツはしばしば徹夜の看病をしたのみならず、薬の投与、料理にまで手を出したという。「彼女はしばしばひどいリユーマチか関節炎と診断されていて、ベッドに寝つきがちだった。」

その母が肺病で死去すると彼は祖父の主治医だったハモンド医師の見習いとなり、新しい薬剤師法 (Apothecaries Act, 1815) に見合う勉強を始めた。一八一六年開業医としての免許を得たが、結局翌年には医学を捨てて、四月には人目を避けて『エンディミオン』(Endymion) の執筆にとりかかっている。その第一行は、こう始まっている。

美しきものは永遠の喜び

A thing of beauty is a joy for ever

十一月にはそれを脱稿し、翌一八一八年十二月には湖畔詩人 (The Lake Poets) の一人ワーズワースやラム (Charles Lamb, 1775-1834) らに一夜会している。

しかしそんな不滅の夜も、三月からの弟トムの看病で色褪せてしまったようである。トムもまた肺病だった。彼はすでに数年来肺を病んでいて、デヴォン州へ転地療養していた。トムの病状が少し回復した時、弟ジョージ夫妻の米国行を送りがてらスコットランドを徒歩旅行したキーツは、その間やはり肺病で死んだ詩人バーンス (Robert Burns, 1759-1796) の墓に詣でたりしたが、雨の中を無理に歩いたために風邪をひき、激しい咳と喉の痛みに襲

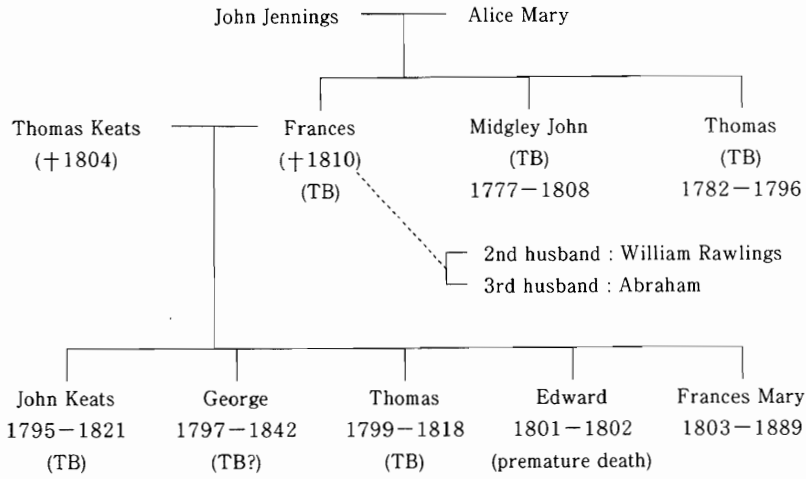


表4 キーツ家の家系図

われることになる。

しかし ロンドンに戻るやいなや再び弟トムの看護に精を出したが、一方、彼の作品『エンディミオン』に対する多くの不評、悪評が彼をまっていた。キーツは、それらの不評にめげず、看病しながらその年の秋から冬にかけて『ハイピアリオン』(Hyperion)の第一、二巻の執筆をした。その第一巻には、医師として肺病の知識のあったキーツが、弟の重い病状に戦慄している様、その死の相を直視している様子がよくわかる。

彼らの大きな胸が苦痛のためにふくらむ以外には
身動きもせず、赤い血管は熱っぽくたぎり渦巻いて
恐ろしく震えていた

Without a motion, save of their big hearts
Heaving in pain, and horribly convulsed
With sanguine feverous boiling gurge of pulse (11111)

そして、一八一九年七月から着手された『ハイピアリオンの転落——ひとつの夢』(The Fall of Hyperion — A Dream)の中で、顔面の白さを描出し、死に向いながらなおそれに至らないという生の悲劇、弟トムの死に対するキーツの精一杯の鎮魂歌が歌われる。

そして私は衰えた顔を見た

人の苦しみによってやせ衰えたのではなく、

殺すことなき不滅の病によって輝かしく白くされた。

その顔は絶え間なく変化し、幸福な死も

それを終らせることができない、死に向いながら

死に至らないあの面ざし。その白さは

百合の花も雪の白をも越えてしまった

Then saw I a wan face.

Not pined by human sorrows, but bright-blanch'd

By an immortal sickness which kills not.

It works a constant change, which happy death

Can put no end to ; deathwards progressing

To no death was that visage ; it had pass'd

The lily and the snow ;

この表情には、弟トムの、あるいは母親の死の顔相が反映しているのではないだろうか。肺病は急性のもの以外は、しばしば慢性疾患として長期の療養中に徐々に衰弱していくものだったので、消耗病 (consumption, decline) という英語はこの病に相応しい。二人の夥しい面ざしの変化はキーツを苦しめ、彼の記憶の中でその

死への変容はついに終止符を打たれることのない印象となり、悲しみとなったのであろう。

トムも看護の甲斐なく、十九歳の誕生日の直前の一八一八年十二月一日に死去している。

この手紙が君達に最悪の報せをもたらす前に、もう心の準備をしていたかも知れない、いや、もしハーサムの手紙がしかるべき時期に着いていれば、この手紙を受取る前に最初の衝撃が過ぎ去っていると、思つて心が慰められる。哀れなトムの最後の日々は最も悲惨なものだったが、最期の時にはそれほど痛みもなく、まさに最期には激痛もなかった。……(一八一八年二月一六日ジョージおよびジョージアナ・キーツ宛)⁽¹⁰⁾

そのトムの死の少し前、キーツはファニー・ブローン (Fanny Frances Brawne, 1800-1865) という女性に出会っていて、その後次第に彼女の魅力の虜になっていき、翌一八一九年には婚約することになる。

……私は長い間どんな完全な幸福も知りませんでした。誰かの死か病気がいつも私の時間を台なしにしてみました——そして今そうした問題が私を苦しめていない時、あなたに強く告白せ

ねばりませんが、別の種類の苦痛が私を捉えているのです。愛する人よ自分に問うて下さい、私を束縛するほどに、私の自由を壊すほどに残酷ではなかったかどうかを。

……（中略）……

私自身どのように美しい人への愛着を表現したらよいのか知りません。私には「輝かしい」というよりもっと輝かしい言葉が、「美しい」というよりもっと美しい言葉が必要です。私は私達が蝶々になって夏の日にたった三日しか生きないことを望むほどです——あなたとのこのような三日間をありきたりの五十年が含みうるよりもっと多くの喜びで満たすことが出来ます。

（一八一九年七月一日ファニー宛）^(11c)

ファニーはまだ完全に成熟した女性ではなく、気分が安定しているとも言えなかった。年端もいかないう娘に——と言っても十九歳になつていたが——それを求める方がむしろ難しかったかも知れない。活動的で四方飛び回る彼女をキーツはとうとう「おてんば」(mix)と名付けざるを得なかった。^(11e)そしてこの手紙の中には、後で述べる、満たされない精神についての記述があることに注目しておこう。つまり恋人から正當な扱いを受けていないこと、深く愛されていないことを、たとえそれが恋する人達にありがちな戯れの叱責であつたにせよ、「残酷」という言葉で表現している

点について。

しかし、この年の四月の婚約以後は、彼の詩の最高の収穫の時だった。まさにそれは、「驚異の年」(annus mirabilis)と呼ぶに相応しかった。しかもそれらの歌の背後には、死のイメージがあるいは明かにあるいは密かに盛られているのを見ることが出来る。

私はなぜ笑つたのだろう。私は知っている

この存在は借りもので、私の幻想は最高の喜びへと広がる

しかし 私はこの真夜中に果てることができるのか

そして世の派手な旗が引き裂かれるのを見ることが出来るのか

実際、詩と名声と美は強烈だ

しかし死はもっと強烈で——死とは生の高価な報いである

Why did I laugh? I know this being's lease

My fancy to its utmost blisses spreads :

Yet could I on this very midnight cease,

And the world's gaudy ensigns see in shreds.

Verse, fame and Beauty are intense indeed

But death intenser —— Deaths is Life's high mead.^(11k)

キーツはこの年の春、インド行の商船の船医として乗り込み、

海上生活によって健康を回復しようかと考えたりしている。^(三六)すでにローマの思想家キケロの時代から、海上航行は一般的な治療法として認められていたのである。^(三七)また氣候治療法 (climatotherapy) とりわけ海風の恩恵を確信していたフランスの医師レネックは、ブリタニイ地方から運ばせた海藻を彼の病棟に敷き詰める試みを真剣に行っていた。^(三八)

そんな五月のある日、キーツは友人の家の近くに小夜啼鳥が巢を作ってしきりに囀るのを二、三時間座って聴いた後、ロマン派の短い詩の中でもっとも偉大なもののひとつ「小夜啼鳥に寄せる頌歌」(Ode to a Nightingale) ^(三九)を創造したのである。そこにもやはり衰弱して死んでいく若者の姿が描かれているが、死に瀕した弟トムの姿や、キーツ自身が医師になるため病院で訓練をしていた時に見た患者の姿が反映されていたのかも知れない。^(四〇)

疲労と熱と焦燥のあるここで

人々は座り、互の呻き声を聞く

ここで中風病みは、残った少ない哀れな灰色の髪を打ち振る

若者は蒼ざめ、亡霊のように瘦せ、そして死ぬ

しかしここでは考えることは悲しみに満たされ

そして鉛の眼は絶望する

The weariness, the fever, and the fret

Here, where men sit and hear each other groan ;

Where palsy shakes a few, sad, last gray hairs,

Where youth grows pale, and spectre-thin, and dies ;

Where but to think is to be full of sorrow

And leaden-eyed despairs ;

キーツはすでに微熱があることに気付いていたし烈しい喉の痛みもあったので、母や弟トムの最期の姿を思い出しながら、そこに自分の姿を重ね合わせていたのかも知れなかった。

彼はおそらく悪夢と化した死の床の意味から逃れることができなかつた。彼は軛地を真剣に考え、結局ハムステッド (Hampstead) ^(四一)を去ってワイト島 (Isle of Wight) ^(四二)へ行つてそこで詩作に励むが、病氣から回復するどころかむしろ悪化したのだつた。

キーツは島で書き始めた詩「レイミア」(Lamia) ^(四三)の中で「冷たい哲学が触れただけですべての魅惑は飛び去るのではないか」(Do not all charms fly / At the mere touch of cold philosophy?) ^(四四)と書いた。彼は医者ではあつたが、大きな悲しみをもって科学の進歩が不可避的に詩の可能性を押し潰すと考えたようだつた。^(四五)しかしむしろキーツは、死を数限りなくもたらす病に対する科学や哲学の無力という絶望的状况を経験した眼で死の恐怖を見詰め、やがて

死を美の世界まで高めること、ある意味でロマン化することを行ったのではなかったのか。「小夜啼鳥に寄せる頌歌」の別の箇所
でキーツは次のように歌う。

薄闇のなかで私は聴く　そして私はいくたびか
安らかな死に半ば恋し

私のおだやかな息を大気の中へ取入れてくれるようにと

あまたの黙想の歌で死の優しい名を呼んだ

いまや痛みもなく真夜中に果てて

死ぬことはいつになく貴重なことに思われる

Darling, I listen ; and, for many a time

I have been half in love with easeful Death,

Called him soft names in many a muséd rhyme,

To take into the air my quiet breath ;

Now more than ever seems it rich to die,

To cease upon the midnight with no pain,^(四)

ここで死が過剰にロマン化されていると簡単に言い切ってよいものかどうか。このロマン派前期およびロマン派詩人達にとつてありきたりの賞揚の対象であった小夜啼鳥^{ナイチンゲール}を、一方では靈魂不滅

(immortality)の象徴とし、他方ではそれに死を与えるという矛盾を含みながら、詩はその終結部へと押し進んでいく。

あれは幻だったのか、醒めている夢だったのか

あの音楽は消えた——私は醒めているのか、眠っているのか

Was it a vision, or a waking dream?

Fled is that music . . . Do I wake or sleep?^(四)

彼は「死」に恋するのに十分な経験をすでに積んでいたし、彼自身、自分の死がそんなに遠いものとは感じられない微候を自覚し始めていたのに違いなかった。彼はファニーにこう書き送っている。

私は散歩中に考える二つの豪華なものがあります。それは貴女の愛らしさと私の死の時です。同じ瞬間にこれら二つを自分のものにする事ができればよいのですが。^(五)

一八二〇年二月三日、彼は自宅に戻って来るのにお金を節約するため——彼は確かに貧しかった——馬車の屋根の上に乗って、厚手の外套を着るのを忘れていた。家に着いた時、友人のブラウ

ン (Charles Amitage Brown, 1786-1842) が「どうしたのか、熱でもあるのか」と訊いた。キーツは冷たいシートに入る時、少し咳をした。ブラウンは、キーツが「これは私の口から出た血だ」と言うのを聞いた。キーツは蠟燭の明りを持って来るように頼み、詳しく血痕を調べてから友人を見上げ、二度と忘れることの出来ない物静かな表情で言った。「僕はこの血の色を知っている——これは動脈の血だ——僕はこの血の色に騙されはしない——この血の濁りは僕の死刑執行令状だ。僕は死ななければならぬ。」^(五二)

この最初の咯血 (haemoptysis, haemorrhage)こそ肺病であることを確信させる徴候だった。当時、肺病の正確な診断を下すことは非常に困難で、他の多くの症状まがいの病名を冠せられていたから、咯血は重要な決め手となる症状だった。そして病理学的に見て、肺病で咯血することは相当病状が進行した証拠であり、決定的な治療法がなかったために、それは死に至る病を宣告されることに等しかった。一八一四年ロンドンに『王立胸部疾患病院』(Royal Hospital for Diseases of the Chest)が設立され、レネックの聴診法に関する論文が一八一九年パリで発表され、一八二三年にはフォープス (John Forbes) が抄訳を出すというそんな背景^(五三)があったにも拘らず、その事実に変わりはなかった。

二月三日夜の咯血直後のキーツの手紙を見てみよう。(両方も妹宛て。)

……私は快方に向かうまでは(手紙を)書かないと決心した。ありがたいことに、私は今そういう状態だ。軽率にも分厚いコート^(五四)を雪解けの陽気の中に忘れて、私は風邪をひきそれが肺へ流れたのだ。用いられたどの療法も期待通りの効果を示し、私は今や、しばらく家の中に留まっている以外何もない。

……(中略)……

ジョージにも同じような発病の大きな危険があったが、もし発病した場合、海の空気がよい医者になってくれるよう望んでいる。海での空気は、陸地よりも常にずっと温和だと、彼は私達への手紙の中で言っている。^(五五)

昨夜また熱が少し出たが、うまい具合に止んだ。今はかなりよいのだが、私は制限するよう義務付けられている少量の食事のために弱っている。これではねずみでも餓死すること請け合^(五六)いだ。

今日から見れば奇妙なことだが、食事制限は当時肺病の重要な治療法^(五七)だった。蒼い顔をして痩せ細るのがこの病気の特徴であれば、従前の姿に戻して体力をつけさせて病魔と闘わせるというのが素朴な発想のように思われるが、実際はそうではなかった。ギリシャのヒポクラテスもローマのガレヌスも栄養をつける方法を

取ったが、十八世紀の後半、とりわけ軽い消化のよい食事に細かな注意が向けられた。^(五七)レネックさえ、栄養を落とし身体が弱れば、その身体に宿っている病気の勢いも併せて落ちるだろうと考えていたようである。むしろ、医者達の間で、栄養をつけさせる考えと、厳格に食事を制限しようとする考えが背反した状態のまま長く続いたのが問題だったのかも知れない。^(五六)しかし、次のような解釈も可能ではないだろうか。肺病にかかり、蒼白い顔をして痩せ細っていくことと、社会的流行としての瘦身が並行して進行し、蒼白さ、肉付きのなさが魅力の基準となっていたこと、この二つの現象が混同され、やがて相乗作用を示して食事制限の方向を取るようになったのではなかったかと。

すでに十六世紀、モンテーニュは痩せて顔色を蒼白くするため、砂を呑み込んで胃を壊そうとする婦人のことを書いていた。蒼白さが女性の美しさの基準のひとつであったのだろう、それゆえ婦人がそのために尽くす努力には際限がないように思われる。

しかし蒼白さは女性の美の基準だけではなかった。確かにそれは男の美しさのひとつの条件になったのかも知れなかった。後に英国首相となったラム(William Lamb, 1779-1848)の妻カロライン(Lady Caroline Lamb, 1785-1828)は、ある夜会でバイロン(Lord Byron, 1788-1824)に会い、最初は嫌っていたがやがて彼に魅惑されていく。彼女は日記に書き記した最初の一句「気づ

い、よこしま、知ることは危険」の下にやがてこう書き足すことになる。「あの美しい蒼ざめた顔は私の運命だ」と。^(五九)そしてバイロン自身も蒼白さを讃える詩を残した。^(六〇)そしてバイロンが肺病で死ぬことを欲していたこと、また一八〇一年当時、肺病患者がどれほど人々の眼に魅力的に映っていたかは、自身肺病であったトム・モア(Tom Moore)の述べる次のエピソードで明かである。

ある日鏡の前に立ったバイロンは友人に言った。「私は蒼白く見える。私は肺病で死にたいものだ。」「どうしてかね」と友人が尋ねた。「なぜなら女性達が、ごらんなさい可哀想なバイロンを、彼は死ぬのに何て素敵に見えるんでしょう、と言うからだ。」^(六一)

肺病で蒼ざめて若く死ぬこと、あるいは自殺によって若く死ぬことには、昔から多くの意味がこめられていたようだ。

まず、病気そのものが長い間神秘であり、呪いや天の審判の結果と考えられていたが、こと詩人に関しては、その意味がもっと強烈であった。つまり、詩人は神と争い、その結果として肉体的欠陥にたたられるが、そのことにより神秘の知識、精神力、そして創造力を賦与されると考えたのだ。^(六二)

アリストテレスが、頭脳充血ということを考え、その症状のためにも多くの人々が詩人となったが、病が癒えると最早少しも詩が作れなくなつたと考えた時、この説は全面的に肯定されていることがわかる。また英国の数学者シルヴェスター(Sylvester, 1814-1897)が「幸福な気管支炎の発作」と呼んだ夜の間に一番よく数学の難問を解けたと言ひ、ドイツの詩人ハイネ(Heinrich Heine, 1797-1856)が、「私の精神的興奮は天才というよりもむしろ病気の結果だ」と語つた時、彼ら自身が病気による才能の發揮を信じていたことが分かる。

ここで、肺病による間歇的な熱(Tectic fever)を考えておくことも必要だろう。夕方以降発熱し、ヒポクラテスが書いたように蒼白く透明な肌を上気させて桃色に染めた時、そこにはまるで希望の紅味、生の気色がさすように思われたのだろう。そして双頬が潮紅することを「死の希望」(spes moribunda, dying hope)と呼ぶのは、死に直前して病人がかえって洋々たる前途を夢見るからだった。

医師マーテン(Benjamin Marten, 1704-)は「肺病患者の希望」(spes phthisica)にこの病状を記してゐる。

……こうした状況で彼らは間隔をおいた希望、最後には彼らの病気に打ち克ち完全な治癒を得られるという希望にのみ支え

られている。彼らが持つている最大の慰めである希望を、彼ら
はできる限り自分の心の中に保持しようとする努力する。^(六五)

その上、眼が大きく輝きを帯びることは、ヒポクラテスにも中国の医書記述にも等しく見られる。蒼白く透明な肌に潮紅がさし、眼が大きくなって輝きが増す時、その人の容貌はすでに述べたラファエロ前派やボッティチェリの絵の中の美しい女性像に限りなく近いことに気付くだろう。

夭折でも、狂気でも、創造力を高めるものは何でも芸術家の属性と考えられた。夭折と言つても、病気による若死だけではなく、冒険や狂気や薬物、自殺による若死をも含めて考える必要がある。

芸術家の死因とその死亡年齢の表を作ってみると、いかにこの事^(六六)が大きな意味を持ちえたかがよくわかる。十九世紀初頭、まさにこの死因の中心であり、また若い年代の死亡率を高らしめたのは肺病であった。そして病気および死を芸術、あるいは芸術家との創造の根源であるとする古くからの考え方を再生し裏付けるように、若い芸術家が肺病にかかり、そして人生を駆け抜けるように生命の焔を一際明るく燃やして死んでいったのだった。

肺病で蒼ざめて見えることが芸術家、あるいは天才のように考えられ始めたのは肺病の流行と無関係ではなかったのだろうが、しかし蒼白そのものが昔から天才の色と考えられていたことを忘

れてはならないだろう。「蒼白は偉人の美華」(Pulchrum sublimium virum forem)だったのである。^(六七)

そしてこの病が消耗性のものであり、身体が痩せていくことも、「最も偉大な天才は最も細き身体を持つ」^(六八)条件に合致していた。

つまり、流行病である肺病にかかり蒼白く痩せた詩人が情熱を燃やして多くの素晴らしいロマンティックな詩を書いた時、天才の条件は肺病患者であることであり、またそれが逆転して、肺病やみであることこそロマン派の天才たる条件になったことは想像に難くない。それはついに、天才が多く肺病あるいは飲酒家の両親から生まれるものだと考えるにまで至ったのである。^(六九)

またこのロマン主義が跋扈した時代には、その中世趣味のためか、滅びたものに対するそこはかとなない情緒のためか、廃墟(ruins)が愛好され、ついにはバイロンのように自らの魂をして廃墟を建たしめようと歌う者もでた。^(七〇)そこには、病で滅びようとする肉体を廃墟にたとえる傾向も読みとることができると。

確かに肺病にまつわるイメージと、ロマン主義にまつわるイメージとは共通する部分が多いように思われる。それは蒼白く、痩せ細り、それでいて情熱的に生き、詩を倦まず書く詩人、その人生は短かく悲劇的に閉じられる、と言ったものであろう。それどころか、肺病の蔓延がロマン主義を惹起したと考えた人々もあつたし、逆にロマン主義的傾向こそが肺病の流行をもたらしたと考

えた人もあつた。

実際、そうした特別な意味を病気に与えることは、その病気の本体が不明であればあるほど激しく行われたのであり、それは今日もまた明日からも行われるのだろう。

天才や夭折といった神話が肺病にまつわりついた時、この病がすぐれて個人的な病気と考えられたことに注目しなければならぬ。何十年かの後にこの病が他人に感染するものであることがわかり、社会病としての性格を正確に把握されるまでは、それは個人の気質や体質、性格をそのまま反映した病気のように考えられていたのである。

早世する詩人達が、想像の世界を追い求め、自由に個性を主張し、形式を問わないいわば極度に敏感な青春を革命的に生きた時、それは真に個性的であり、かつ広く社会に浸透した思想となったのだ。限りなきものに対する情意のあこがれを抱きながら^(七一)短命に終わるという矛盾は、それ自体人々に疑問を起こさせなかつたようである。

それどころか、当時は病気の雰囲気社会一面に広がっていたために、健康はほとんど野暮な特徴であるかのように考えられていたのである。そのために、恋人同士の食事の際には、食物に無関心を示すことが正しいマナーで、男達の間でものうげな気の抜けたような女性に対して情熱を燃やすことが流行していたという。

そのために女性は、食欲減退を起こすレモンジュースや酢を飲む努力を払わなければならなかった。⁽¹⁶⁾

肺病が社会に流行し、痩せ細って蒼白い人々が増えた時、人々の趣味が蒼白に向かったことはバイロンの例ですで見ただけである。あるいは、人々の痩せて蒼白い趣味に肺病がびつたり症状を示したために、一層一般性を獲得したのかも知れなかった。要は、肺病のイメージが、当時の美のイメージと旨く合致したことであった。

そうした中で、例えば秋のシンボルとイメージが、変化していったこと、そこに病のイメージが塗り込められていったことがある。秋は古代から長い間稔りと収穫の時であったが、少し視点を変えれば、厳寒の冬——人生の冬とも重なるのだらう——へと移行する、落葉、枯葉の満ちた時となってしまう。

キーツと同年代のシェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822) は、「西風によせる頌歌」(Ode to the West Wind) の中で次のように歌っている。

おお荒々しい西風よ、秋の存在の息吹よ
お前の眼に見えない登場のために
枯葉は、魔法使いから逃れる亡霊のように
黄や、黒や、蒼白く、熱っぽい赤

悪病に取りつかれた多くのもの

O Wild West wind, thou breath of Autumn's being,
Thou, from whose unseen presence the leaves dead
Are driven, like ghosts from an enchanter fleeing,
Yellow, and black, and pale, and hectic red,
Pestilence-stricken multitudes :⁽¹⁷⁾

しかし、キーツも同じように秋を見ていた訳ではなかった。すでに述べたように彼は少年時代には腕白で快活だった。それは、必ずしも当時のロマン派詩人の病弱で蒼白いイメージと一致しない。秋もまた多様なイメージを持っていたこと、あるいは詩人自身に希望や稔の季節と考えられたことは、「秋に寄す」(To Autumn) の中に見られる。

かすみと熟れた豊饒の季節よ、
成熟した太陽の親しい心からの友よ
かやの廂に巻きついた葡萄づるに どのように
果実をつけ祝福するかを太陽と策謀する
苔むした小屋の木を林檎でたわませ
あらゆる果物を芯まで熟れさせる

Season of mists and mellow fruitfulness,

Close bosom friend of the maturing sun,

Conspiring with him how to load and bless

With fruit the vines that round the thatch-eyes run

To bend with apples the mossed cottage-trees,

And fill all fruit with ripeness to the core.

ここに描かれているのは、日曜の散歩から得た、ただ輝かしい秋の自然であり、死の影も、病の影さえ見られない。この詩は一八一九年九月十九日に書かれたもので、この年の主要な頌歌の最後をなすものだったが、二日後友人に「今、季節は何と美しいだろう——大気はなんと清々しいのだろう。それにはおだやかな鋭さがある」と書いて、彼の最後の楽しい秋を満喫した。彼はすでにこの時肺病に感染していた筈だが、肺病が心理的、肉体的影響を与えることよって彼の作品に悲劇的要素を加えた訳ではないことが分かる。

つまり、確かにキーツの詩の中にロマン派的情绪がこめられていたにせよ、それが彼の思想、詩作態度のすべてに及んでいたのではなく、それゆえ、ひ弱で蒼白く憂鬱な者達の一人としてのみキーツを捉えることは、彼の実像を誤またせると言わざるを得ない。

さて、そのキーツは一八二〇年二月三日に咯血してからというもの、「ほとんど野菜だけの食事」に限定されながら、「医者達は私は大したことはないと言いますが、しかし私は体重と胸の細さが和らぐまでは信じられない」と、おそらくは痩せ細らせて、病勢をそこうとする食事制限療法に矛盾した、しかし極めて人間として自然な反応を示している。そして恋人に宛てて「恐らく貴女の考えでは、私は病気を実際以上に深刻に考えてきたのでしよう。貴女の腕の中ではなく、地面の中へ沁りこんでいくとは何と恐ろしい可能性だったのでしようか。その違いは驚くべきもので、愛と死は最後にやっ来て来ます」と書いて、二人で健康な夏を迎えようと呼びかけるが、彼はもう身体がきかなくなっていたばかりか、詩ももうほとんど書けなくなっていたのだ。友人の一人セヴァン(Joseph Severn, 1793-1879)は七月十二日知人宛ての手紙にこう書いている。

あわれなキーツは一層来世に接近している——二週間前に胸の血管を破裂させた——私はそれを何回も見ましたが——特に今回の前に——それ以来一度——そして、私は彼がなお回復すると思う、と言えは君を喜ばせるだろうが——彼の容貌は衝撃的で、今や私にあわれなトムを想い出させる。

こうした時にイタリアのピサにいたシェリーから手紙が届く。彼はバイロンと同じく貴族の出身だったが、バイロンが自らの出身を誇りとしつつ英国社会を罵倒したのに対し、シェリーは貴族であることも英国国民であることも心に留めないかのように、自己の生き方を貫いた詩人だった。ロマン主義に革命的という意味をひとつ付け加えるならば、シェリーの名前は必ずそこに付け加えられるだろう。

そのシェリーもまた一八一五年に肺病の宣告を受け、その他の事情もあってイタリアへ来ていた。彼はバイロンと会して、共にジェノヴァの郊外に居を定めていて、それはまさに「おまえ亡命者の天国よ、イタリア！」と呼ぶにふさわしい状況だった。

当時イタリアは、十八世紀に英国貴族階級の通過儀礼として流行した大周遊旅行 (Grand Tour) の一大目的地であると共に、肺病患者の療養地としても有名になっていた。

しかし、イタリアの日々も決して彼には優しくなかった。一八一八年、赤ん坊の長女クララはヴェネツィアで、翌年長男ウィリアムはローマでそれぞれ熱病のため死んだ。

キーツとシェリーはすでに一八一七年相識していたが、キーツの病状が思わしくないのを知って、シェリーは急ぎイタリアへの誘いの手紙を認めた。それは、一八二〇年七月二十七日、ピサでのことだった。

私は大きな痛みをもってあなたが耐えてこられた危険な災難を聞き、またそれを私に説明してくれたギズボーン氏は、あなたが消耗病的容貌 (consumptive appearance) を帯びていることを付け加えました。この肺病という病気は、あなたが書いたような立派な詩を書く人がとりわけ好きで、また英国の冬の助力のもとに、それはしばしばその選択をほしきままにしています。

…… (中略) …… そのように恐ろしい災難のあとで、イタリアで冬を過ごすことはきつと良いと思います。…… (中略) …… 海の空気は弱った肺には特別に良いのです。とにかくイタリアを見るべきですし、私とその動機として提案するあなたの健康は、あなたにとって良い口実になるかも知れません。——私は彫像や絵画や廃墟について熱弁をふるうのをよしておきましょう。

このシェリーの手紙ほど当時の肺病に対する考え方を如実に示しているものはまたとないだろう。最初に、肺病特有の、痩せ衰え、眼が大きく輝き、蒼白い肌になることをたつた二単語 (consumptive appearance) で言い表していること、次にこの病気が天才の病気、詩人病であることを述べて、肺病にまつわるドラマティックなイメージをすつかり受け入れていることが分かる。シェリーはキーツの才能を認めていたが、この表現の中に肺病にかか

った自分の姿も含めていたのかも知れない。そして、当時広く信じられていた海の空気が肺に良いという考えは、かつてキーツ自身がインド航路の船医になって肺病を癒そうとしたことと合致している。イタリアが、肺病患者にとつて有効だと考えられていた太陽や暖かさに満ちているばかりでなく、そこには多くの芸術作品や、その上廃墟さえあるのだった。

キーツは、しかしこの誘いを断わっている。それは、シエリーのサークルの中でさえ自分の自由が束縛されると考えたからだ^(八五)。しかし、彼のイタリア行きの決心は変わらなかった。その上「英国での一冬は、疑いもなく私を殺すでしょう。それで私は、船が陸づたいでイタリアへ行くことに決めました。それについて、私はあまり大きな希望を持っていません——なぜなら、追い出すのが容易でない病気の核が私の中にあると思うからです^(八六)」と書いて、決して自分の病状を楽観することはなかった。

九月十七日の朝、ロンドン発ナポリ行のマリア・クラウザー号 (Maria Crowther) は僅か百二十七トンの小船で、同道したのは友人の中で唯一人暇のあるセヴァンだった。船長はキーツのために山羊を乗せようとしたがだめだった。勿論、山羊の乳が肺病に良く効くとされていたからであろう。またキーツは、航海のために、阿片チンキ (laudanum) を含む薬を途中で買わせているが、これは治療薬としてよりはむしろ、もし自分が癒える見込みが無いと

悟った時自殺するためのものだった^(八七)。

途中から、もう一人の肺病患者が乗船してきた。コットレル嬢 (Miss Cotterell) といい、「彼女はキーツとまったく同じ肺病に苦しんでおり——同じ徴候を示して」このとても感じのよい娘は「キーツよりも病状が良いと主張し——キーツは、彼女は明らかに自分より良くないと感じて^(八八)」状態だった。しかし困ったことは二人の症状が違ふことだった。換気の窓を閉めると、娘は気絶して何時間も気が付かないし、また窓を開けて外の新鮮な空気を入れるとキーツは激しい咳に襲われ、しばしば咯血するのだった。

窓の問題は直ちに換気の問題に結びつくが、当時、換気という発想は乏しく、英国の都会では窓税 (Window Tax) が課されて換気に反対する傾向を示していたし、また熱保存という観点からも極力部屋を密閉する方向にあった。また、冷たい外気は肺を刺激して咳を起こさせると恐れられ、とりわけすさまじい風が警戒されて、鍵穴にまで目張り^(八九)が施されたという^(九〇)。

しかしいささか滑稽なことに、外出の際の防備は相当重装備だったのだからと考えられるが、実際には瘦身の流行と共に、できるだけ肌を見せるために、薄いしかも透き通った着物を身につけることが流行していて、換気といささかちぐはぐな様相を呈していた。

また換気以上に恐れられたのは夜に窓を開けることで、それは空気の他に夜に窓から悪魔が忍びこんで、病気や災害をもたらすという中世以来の観念が、まだなお強く人々の心を支配していたからだろう。

そうした換気や夜気についての考え方は、埋葬されない人や動物の屍体の腐敗や顔化、沼沢、溜り水、等々から発する悪い空気、つまりミアスマ（*miasma* 瘴気）が大気を汚染し、それこそが病気を引き起こすという、瘴気説（*miasmatic theory, pythogenic theory*）と同列の考え方だった。十八世紀末のフランス革命と産業革命が、人々に新しい思想と生活様式をもたらしたにも拘らず、なお古い迷信が巢食っていて、医学、医療に徐々にしか新しい希望の光が射さなかった。また十八世紀末に「プリーストリー（*Joseph Priestley, 1733-1804*）により酸素が発見され、ベドーズ（*Thomas Beddoes, 1754-1808*）等によって酸素療法が始められていたが、それはまだよく理解されていなかった。

さて、キーツの乗った小船は、ビスケー湾で嵐に弄ばれながらナポリへと接近していった。そんな時、キーツは不意に死の誘惑を感じたことを友人ブラウンに宛てて書いている。ロンドンを出発してから一ヶ月以上経った十月二十一日にナポリに到着したが、検疫（*quarantine*）のため十日間の上陸差止めを受けている。キーツは、ロットレル嬢の様子を見るのは耐えられないと手紙に書く

が、その手紙さえ薫蒸消毒（*fumigation*）を受けて変色している。そして上陸を許されたキーツは、「ナポリを見て死ね」と言われる風光名媚にも心をうごかされることなく、「私はナポリについて一言も言えません。私は、周囲の何千という珍しいものにも全く関心が湧かないのです」と書いて、彼がもう気力さえもすっかり奪われていたのが分かる。

キーツは、ナポリからローマに到着すると早速、当時英国からローマに移り住んで、いち早く気候と病気との関係を論じていた呼吸器系疾患の専門家クラーク医師（*Dr. James Clark later Sir, 1788-1870*）の診断を受けている。クラーク医師が出したキーツの病症に関する宛名不詳の手紙にはこう書かれている。

私が診た限りでは、彼の病気の主な部位は胃にあるようです。私は心臓の病気と、恐らくは肺の病気をいくらか疑っています……（中略）……私は、彼の精神的疲れと傾注が病気の原因だと思えます——もし私が彼の気分を楽にすることができれば、彼は癒えるものと思います。……（中略）……実際、健康を取り戻すために外国にやって来たのだから、転地療養にむくようなあらゆることがなされなければなりません——つまり、天候が許せばいつでも遠乗りできるように、彼が馬を買うか月極め借りするかすること、その他。

キーツの病状は相当悪化していて、喀血の他にもすでに肺病を疑うのに十分な症状を示していたにも拘わらず、クラークは胃病のように言っている。確かに、結核の末期には腸結核の症状を示し、不消化と栄養分摂取低下による極端な体力消耗と、病勢の進行があるが、胃熱(Gastric fever)という紛らわしい名称を与えられ、胃固有の疾患と混同されていた時代背景を反映している。

実際、結核症に対する名称は英語ひとつをとってみても無数にあつて、それらは症状そのままのものもあれば、病理解剖学的なものもあり、また病人の外見的な印象であることもあつた。

病理学的命名という点では、一六五〇年にオランダのシルヴィウス(Sylvius, or Franciscus de le Boë, 1614-1672)が肺労患者の肺に結核状の変化を発見し、これを結核結節(tubercle)と名付けたのが、今日の結核(tuberculosis)という名称の起源であつたが、そう呼ばれるには一八三九年、スイスのシェーンライン(Uhahn Lucas Schönlein, 1793-1864)を待たねばならなかつた。

クラークが、精神的疲れを病氣の原因としたのも、また当時の有力な意見だつた。すでにシルヴィウスは「心の不安、とりわけ大きな悲嘆」を肺病の原因のひとつとして上げていたし、モートンは「苦惱」を、アウエンブルガーは「満たされない願望」を、レネックは「憂鬱な激情」を考へていた。^{162c}

それはさわめてロマンティックな考え方なのだが、悲嘆や激情

の最たるものは恋愛であり、病や死を巡って独特な働きをするものだと考えられていた。キーツにしても、恋人ファニーと必ずしも旨くいっていなかったし、その気持ちの不安定さは、彼が病気がちで、時には長い間彼女から離れて生活せねばならなかつたことで、一層拍車がかかったにちがひなかつた。キーツは、やはり肺病で苦しんでいた友人とワイト島(Isle of Wight)に転地をするが、そこから書き送っている——「あなたはおそらく私を良くすることができたでしょう、と言います。それからあなたは私を悪化させたでしょう。今や、あなたは大変効果のある治療を施せるのです。癒してもらうために、私の愛するお医者さんよ、私はいかほどの料金をお払いすればよろしいでしょうか」。また「もし私が回復したら、回復の日に私はあなたのそばにいて、もう何物も私を引き離すことはできないでしょう。もしあなたが、私をそのように保ってくれる唯一の薬であればよいのですか」と書いて、恋人と共に居ること、あるいは恋そのものが病を癒してくれると信じているのが分かる。恋が、病を癒すという考えは、たとえばバイロンの生涯にも見られる。ヴェネツィアで識り合ったマダム・グイッチョーリが、ラヴェンナの病床で咳をし、血を吐いた時、医師の処方した治療とは、バイロンの来訪であつた。グイチョーリ伯夫人テレザは、「ロードバイロンのおそばにいて、私のおぼえる言ひようもない幸福感は、私の健康によい効果

キーツの病状は相当悪化していて、喀血の他にもすでに肺病を疑うのに十分な症状を示していたにも拘わらず、クラークは胃病のように言っている。確かに、結核の末期には腸結核の症状を示し、不消化と栄養分摂取低下による極端な体力消耗と、病勢の進行があるが、胃熱 (Gastric fever) という紛らわしい名称を与えられ、胃固有の疾患と混同されていた時代背景を反映している。

実際、結核症に対する名称は英語ひとつをとってみても無数にあって、それらは症状そのままのものもあれば、病理解剖学的なものもあり、また病人の外見的な印象であることもあった。

病理学的命名という点では、一六五〇年にオランダのシルヴィウス (Syvius, or Franciscus de le Boe, 1614-1672) が肺労患者の肺に結核状の変化を発見し、これを結核結節 (tubercle) と名付けたのが、今日の結核 (tuberculosis) という名称の起源であったが、そう呼ばれるには一八三九年、スイスのシェーンライン (Johann Lucas Schönlein, 1793-1864) を待たねばならなかった。

クラークが、精神的疲れを病気の原因としたのも、また当時の有力な意見だった。すでにシルヴィウスは「心の不安、とりわけ大きな悲嘆」を肺病の原因のひとつとして上げていたし、モートンは「苦惱」を、アウエンブルガーは「満たされない願望」を、レネックは「憂鬱な激情」を考えていた。^(一九二)

それはきわめてロマンティックな考え方なのだが、悲嘆や激情

の最たるものは恋愛であり、病や死を巡って独特な働きをするものだと考えられていた。キーツにしても、恋人ファニーと必ずしも旨くいっていなかったし、その気持ちの不安定さは、彼が病気がちで、時には長い間彼女から離れて生活せねばならなかったことで、一層拍車がかかったにちがいない。キーツは、やはり肺病で苦しんでいた友人とワイト島 (The Isle of Wight) に転地をするが、そこからこう書き送っている——「あなたはおそらく私を良くすることができたでしょう、と言います。それからあなたは私を悪化させたでしょう。今や、あなたは大変効果のある治療を施せるのです。癒してもらうために、私の愛するお医者さんよ、私はいかほどの料金をお払いすればよろしいでしょうか^(一九七)」。また「もし私が回復したら、回復の日に私はあなたのそばにいて、もう何物も私を引き離すことはできないでしょう。もしあなたが、私をそのように保ってくれる唯一の薬であればよいのですか^(一九八)」と書いて、恋人と共に居ること、あるいは恋そのものが病を癒してくれると信じているのが分かる。恋が、病を癒すという考えは、たとえばバイロンの生涯にも見られる。ヴェネツィアで識り合ったマダム・グイッチョーリが、ラヴェンナの病床で咳をし、血を吐いた時、医師の処方した治療とは、バイロンの来訪であった。グイチョーリ伯夫人テレザは、「ロードバイロンのおそばにいて、私のおぼえる言いやうもない幸福感は、私の健康によい効果

をおよぼしました^(一九)”と言って、肺病の症状が、一度は切れかかっていた恋によって癒されたことを誇らし気に示したのだった。また、キーツの咯血により彼が肺病であることが明確に分かったにも拘わらず、ファニーは婚約を破棄することを拒んで、大いにキーツを喜ばせたのだが、どのみち肺病の療養のために、二人は永遠に別れなければならなかった。

二度とファニーに相見えることのない船旅へ乗り出したキーツは、友人のブラウンに宛てて次のように書いている。

私がつともそのために生きたいと願うまさしくそのものは、私の死の大きな理由となるでしょう。私は、それをどうしようもありません。誰にもどうしようもありません。私が健康でも、それが私を病気にさせるでしょうし、私の状態でどうして耐えることができるでしょう。私が何についてくどくど言っているか察しがついていると思います。——あなたの家での私の病気の初期に、私の最大の痛みが何であったかを知っているでしょう。私は、昼も夜も、これらの痛みから解放されることを願う、やがてそれらを止めました。なぜなら、死が何も無いよりはましなそれらの痛みをさえ壊してしまうからです。……(中略)……ブローン嬢を去る考えは何ものより恐ろしい——闇の感覚が私の上に乗ってくる^(二〇)。

激しい恋の思いが、やがて病のかわりに自分を亡ぼすと感じたキーツは、この手紙の一月後に、「私は健康な時に彼女を抱いておくべきでした、そうすれば私は健康でいられたでしょう^(二〇)」と書いて、恋の成就が心の痛みも、病をも取り去ったであろうことを確信している。そして、二度とそれも叶わなくなった今、彼は「ああ、もし彼女の住んでいる近くに埋められたら!」と書き、「もし回復したら、この情熱が私を殺すだろう」と言って、消えない恋の焰の強さに苛立ち、苦悶している。

こうした激しい、満たされない恋情は、すでに一篇の詩「情知らずの美女」(La Belle Dame Sans Merci)として、一八一九年の三月から四月に書かれていた。この詩作にあたって、キーツはスペンサー(Edmund Spenser, 1552?99)の「フェアリー・クイーン」(The Faerie Queene)の中に登場する魅惑的な女と、多くのパラッドに登場する破壊的な愛の物語に大きな影響をうけていた^(二〇)。この美女の呪縛を受けた「中世の騎士」達が、どのように蒼ざめ衰えていくのか、その様をキーツの詩句に見てみよう。

II

ああ、騎士よ、何を悩んでいるのか、
 そんなにもやつれ、そんなにも悶えて。
 リスの倉は満ち、

をおよぼしました」と言つて、肺病の症状が、一度は切れかかっていた恋によつて癒されたことを誇らし気に示したのだった。また、キーツの咯血により彼が肺病であることが明確に分かつたにも拘わらず、ファニーは婚約を破棄することを拒んで、大いにキーツを喜ばせたのだが、どのみち肺病の療養のために、二人は永遠に別れなければならなかつた。

二度とファニーに相見えることのない船旅へ乗り出したキーツは、友人のブラウンに宛てて次のように書いている。

私がつともそのために生きたいと願うまさしくそのものは、私の死の大きな理由となるでしょう。私は、それをどうしようもありません。誰にもどうしようもありません。私が健康でも、それが私を病気にさせるでしょうし、私の状態でどうして耐えることができるでしょう。私が何についてくどくど言っているか察しがついていると思います。——あなたの家での私の病気の初期に、私の最大の痛みが何であつたかを知っているでしょう。私は、昼も夜も、これらの痛みから解放されることを願ひ、やがてそれらを止めました。なぜなら、死が何も無いよりはましなそれらの痛みをさえ壊してしまうからです。……(中略)……ブローン嬢を去る考えは何ものより恐ろしい——闇の感覚が私の上によつてくる。

激しい恋の思いが、やがて病のかわりに自分を亡ぼすと感じたキーツは、この手紙の一月後に、「私は健康な時に彼女を抱いておくべきでした、そうすれば私は健康でいられたでしょう」と書いて、恋の成就が心の痛みも、病をも取り去つただろうことを確信している。そして、二度とそれも叶わなくなった今、彼は「ああ、もし彼女の住んでいる近くに埋められたら！」と書き、「もし回復したら、この情熱が私を殺すだろう」と言つて、消えない恋の焰の強さに苛立ち、苦悶している。

こうした激しい、満たされない恋情は、すでに一篇の詩「情知らずの美女」(La Belle Dame Sans Merci)として、一八一九年の三月から四月に書かれていた。この詩作にあたって、キーツはスペンサー(Edmund Spenser, 1522-99)の「フェアリー・クイーン」(The Faerie Queene)の中に登場する魅力的な女と、多くのバラッドに登場する破壊的な愛の物語に大きな影響をうけていた。⁽¹⁰¹⁾ この美女の呪縛を受けた「中世の騎士」達が、どのように蒼ざめ衰えていくのか、その様をキーツの詩句に見てみよう。

II

ああ、騎士よ、何を悩んでいるのか、
 そんなにもやつれ、そんなにも悶えて。
 リスの倉は満ち、

収穫も終わったのに。

III

汝の額には白百合が見え、
苦しみの湿りと熱の露がのり、
汝の頬からは薔薇も消えかかり
ただちに衰えもしている。

II

Oh, what can ail thee, knight-at-arms,
So haggard and so woe-begone?
The squirrel's granary is full,
And the harvest's done.

III

I see a lily on thy brow,
With anguish moist and fever-dew,
And on thy cheek a fading rose
Fast withereth too.
(1011)

百合も薔薇も、身体的美を象徴するものとして文学の常套句で

あったが、苦悶の汗と熱がやがて体力を消耗させ、白さと蒼白さが生気の証である薔薇の色を奪う時、肺病による症状が、これらの語を使うことで簡潔に、しかも生々しく描写されている。

この「情知らずの美女」は、しかし、医学を捨てて詩作に走りながら、やがては世に何の役にも立たずに終わってしまうのではないかとというキーツの恐怖、悪夢をも反映していたのかも知れない。彼の婚約は、この葛藤をさらに深めたのに違いなかった。(1011)

しかし、愛と病気との関係は、結核菌が発見され、その本性が明らかになった二十世紀になっても、そのロマンティックな像を保持し続けていたことは、トーマス・マン(Thomas Mann, 1875-1955)の『魔の山』(Der Zauberberg, 1924)の次の一節を見てもとよこ(1011)

しかしこの純潔の勝利は、あくまで外見上の勝利、戦果なき勝利にすぎない。なぜなら愛の要求は、これを阻んだり抑圧できたりするものではないからである。愛は抑圧されても死にはしない。それは生きつづけて、暗黒の深部で依然として要求を貫徹しようとしつづけ、やがては純潔の拘束を脱してふたたびその姿を現わすが、しかしその姿はまったく変化していて、それと見分けがつかない。——では、この否定され抑圧された愛がふたたび現れでる際の姿、愛がかぶる仮面はどういうもので

あろうか……(中略)……。病気がそれである、病気の症状は、
 仮面をかぶった愛の活動であり、いっさいの病気は、変装した
 愛にはかならない。⁽¹⁰⁶⁾

ここにも、愛すなわち病気という図式が見られる。キーツから
 百年を経た二十世紀の前半にこのような考えが生まれたと考える
 より、十九世紀を通じて、情熱が病気、とりわけ肺病を引き起こ
 し、愛を得ることこそ最良の治療であるとするロマンティックな
 考えが社会を覆っていたと考えた方がよいだろう。

病気の原因がよく分からないということは即ちどんなものでも
 その原因と考えられ得たわけで、報われない愛と情熱をその一例
 とすれば、十九世紀を通して肺病の原因に数えられたものは、列
 挙すれば数限りない。そこには、今日われわれが日々慣れ親しん
 だ悪習が数多く並んでいる。いわく、度を越した食事、飲酒、運
 動不足であり、ダンスであり、薄着であり、時にその反対の厚着
 であり、房事過多である。

またクラーク医師は、シデナムの推奨した乗馬を第一の治療法
 として挙げているが、腸結核という末期症状を示し始めていたキ
 ーツにとつて、この療法は過激で死期を早めるもの以外の何もの
 でもなかったであろう。さらに悪いことには、クラークの治療が
 ほとんどいつも瀉血^{しゃけつ}だったということである。セヴァンからブラ

ウンへの手紙を見てみよう。

……瞬間、咳が彼を捉え、そしてほとんどコップ二杯分の血
 を吐いた——私はすぐさまクラーク医師を呼び、彼はその様子
 を見て、ただちに腕から八オンス(約二三〇cc)の血を抜いた
 ——それは、まったく黒く濃かった。キーツは大変驚き落胆し
 た——ああ、私はなんと恐ろしい一日を彼と過ごしたことが——
 彼は寝台から飛び起き「今日が私の最期だ」と言った——……
 翌朝も同じ量ほどの血が迸り出た——そして医者は、同量の血
 を抜くのが得策だと考えた。——キーツは(略)血を抑制する
 ために、できる限り低い(栄養)状態に留めておくように要求
 されている——それで彼は弱々しく憂鬱だ——彼は毎日、飢え
 のため死んでしまうとわめく——それで私は許されているより
 も多くの量を彼に与えさせられる——これが私にとってどれほ
 ど恐ろしいことか分かりますまい——一方では医者が、許され
 たより私が多く与えることで彼を殺すだろうと言うのです。⁽¹⁰⁷⁾

瀉血(刺絡、放血、phlebotomy, venesection, bloodletting, bleed-
 ing)は、ギリシャ時代から重要な治療法のひとつで、ローマの
 医師ガレノスが液体病理学説の中で、血液過剰な多血質(Sanguine)
 の人には瀉血が必要であると説いて以来、この学説がヨーロッパ

の医学思想を千六百年の長きにわたって支配したことを考えると、人間の意識変革の難しさを思わざるをえない。

この瀉血という療法は、どんなに患者が衰弱していても用いられた方法で、下剤による治療と同じ位の患者を死に至らしめたに違いなかった。そのため、この不調の体液を排除するという美名の下に行われた療法は、「吸血鬼」療法 (Aderlass, Vampirismus, Vampirism) と呼ばれるに至り、一回一〇〇から時に一リットルにも及ぶ血液が放出されたのだった。また、生理学的医学を唱えてパリに重きをなしたブルッサー (François Joseph Victor Broussais, 1772-1836) と、レネックとは病気の原発巣と死因とに関して意見を異にしていたが、瀉血を共に第一等の治療法として高く評価し推奨した。ブルッサーは、食事制限とそれまでパリのどの医者も試みたことのなかった蛭 (leech) による腹壁からの瀉血を行ない、彼の名声が最高潮に達した一八三三年には、四千百万匹の蛭がフランスに輸入された。

英国でも、蛭がよく日常的に使用されていたことは、例えばジョン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) の手紙の中に、具合の悪かった「私の母はもう蛭は必要ではありません」と書かれていることでも分かる。しかも、それは当時「ハム一本と四匹の蛭」という素晴らしい贈物にもなりえたのだった。またジェーンの周辺では、蛭のみならず、吸角 (cupping glass) を用いた吸い玉

放血法も行われていた。吸角療法とは、中空のガラス罐の一端にゴム球を取り付けた吸角子を、皮膚に吸着させて悪血の膿汁などを吸い取る方法で、吸角のことを日本語では吸瓢、すいだま、吸玉とも言っている。

さて、かつては蒼白さと詩で社交界の一大寵児であったバイロンは、故国英国を去ってイタリアで浮名を流しつつ『ドン・ジュアン』(Don Juan, 1818-1822) を書き継いでいた。しかし、ギリシャ独立戦争支援のために、一八二三年、その地に旅立った。

バイロンはギリシャでの困難な仕事の最中、脳出血のために倒れて、「ドクタア・ブルーノは彼に瀉血を施そうと思った、しかし血をとられるという考えはある種のプリミチヴな人々にそうであるごとく、たまらない恐怖をよびおこすのだった。それから彼のこめかみに蛭をのせたが、それで脳出血を止めることはできなかった」のだった。それから二カ月ほど経った四月十日、バイロンは悪寒におそわれ、発熱とリユーマチ性の苦痛を訴えた。ブルーノが瀉血を勧めると、彼は、「瀉血以外の療法はないのですか。槍で死ぬ人よりもランセット (外科用刃針) で死ぬ人の方が多いものです」と断っている。

結局、彼は瀉血を施され、蛭と芥子泥 (mustard plaster) 療法が続けられた。やがて窒息の兆候が認められ、喘鳴が喉から出た。医師達は、この昏睡から彼を引き出すために蛭を顔にのせた。血

の医学思想を千六百年の長きにわたって支配したことを考えると、人間の意識変革の難しさを思わざるをえない。

この瀉血という療法は、どんなに患者が衰弱していても用いられた方法で、下剤による治療と同じ位の患者を死に至らしめたに違いなかった。⁽¹⁰⁾そのため、この不調の体液を排除するという美名の下に行われた療法は、「吸血鬼」療法 (Aderlass, Vampirismus, Vampirism) と呼ばれるに至り、一回に一〇〇%から時に一リットルにも及ぶ血液が放出されたのだ⁽¹¹⁾。また、生理学的医学を唱えてパリに重きをなしたブルッサー (François Joseph Victor Broussais, 1772-1836) と、レネッタとは病氣の原発巣と死因とに関して意見を異にしていたが、瀉血を共に第一等の治療法として高く評価し推奨した。⁽¹²⁾ブルッサーは、食事制限とそれまでパリのどの医者も試みたことなかった⁽¹³⁾ 蛭 (leech) による腹壁からの瀉血を行ない、彼の名声が最高潮に達した一八三三年には、四千万匹の蛭がフランスに輸入された。⁽¹⁴⁾

英国でも、蛭がごく日常的に使用されていたことは、例えばジーン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) の手紙の中に、具合の悪かった「私の母はもう蛭は必要ではありません⁽¹⁵⁾」と書かれていることでも分かる。しかも、それは当時「ハム一本と四匹の蛭⁽¹⁶⁾」という素晴らしい贈物にもなりえたのだ⁽¹⁷⁾。またジェーンの周辺では、蛭のみならず、吸角 (cupping glass) を用いた吸い玉

放血法も行われていた。吸角療法とは、中空のガラス罐の一端にゴム球を取り付けた吸角子を、皮膚に吸着させて悪血の膿汁などを吸い取る方法で、吸角のことを日本語では吸瓢、すいだま、吸玉とも言っている。

さて、かつては蒼白さと詩で社交界の一大寵児であったバイロンは、故国英国を去ってイタリアで浮名を流しつつ「ドン・ジュアン」 (Don Juan, 1818-1822) を書き継いでいた。しかし、ギリシャ独立戦争支援のために、一八三三年、その地に旅立った。

バイロンはギリシャでの困難な仕事の最中、脳出血のために倒れて、「ドクタア・ブルーノは彼に瀉血を施そうと思った、しかし血をとられるという考えはある種のプリミチヴな人々にそうであるごとく、たまらない恐怖をよびおこすのだった。それから彼のこめかみに蛭をのせたが、それで脳出血を止めることはできなかった」の⁽¹⁸⁾ だった。それから二カ月ほど経った四月十日、バイロンは悪寒におそわれ、発熱とリユーマチ性の苦痛を訴えた。ブルーノが瀉血を勧めると、彼は、「瀉血以外の療法はないのですか。槍で死ぬ人よりもランセット (外科用刃針) で死ぬ人の方が多いものです⁽¹⁹⁾」と断っている。⁽²⁰⁾

結局、彼は瀉血を施され、蛭と芥子泥 (mustard plaster) 療法が続けられた。やがて窒息の兆候が認められ、喘鳴が喉から出た。医師達は、この昏睡から彼を引き出すために蛭を顔にのせた。血

が顔を流れ、二十四時間この状態のままに放って置かれた後、バ
イロンは息絶えた。

あらゆる病気とその症状に対する療法として蛭が多用されてい
たことは、この昏睡に対する処置でも明らかであろう。死に瀕し
たバイロンの顔面に蛭がのせられ、赤い血が糸を引いて流れる様
には、もはやロマンティックな趣はまったくなく、むしろグロテ
スクでさえあっただろう。確かにこの療法には絶大な信が置かれ
ていた。例えば一八三〇年に、すでに八十歳を越えていたゲーテ
(Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) は大咯血をした時、
一リットルもの血を抜き取られたし、ドイツのライプツィヒでは、
肺炎患者に瀉血を施さなかったために起訴された医師があつたこ
とを考えると、瀉血の現実には、肺病のロマンティックなイメージ
とかけ離れていたと言つてよいだろう。

やがて瀉血に対して批判的なフランスの医師ルイ(Pierre Charles
Alexandre Louis, 1787-1872)は、医学において初めて統計学的
方法を駆使して、『刺絡の効果に関する研究』(*Recherches sur les
Effets de la Saignée*, 1835)を書き、瀉血の効果について数値的裏
付け——成功例と失敗例の検証——が必要であることを説いた。
また、それより少し前の一七九三年に、英国の評論家・政治家の
コベット(William Cobbet, 1762-1835)は、アメリカのフィラデ
ルフィアで、ある医師が発見したという黄熱病に対する新療法が

単に旧来の下剤と瀉血の組合せに過ぎないと非難して、瀉血こそ
「世界の人口減少に貢献した偉大な発見の一つである」と述べた。⁽¹⁰⁾

肺病の治療法として、大気療法(open-air treatment)を唱え、
瀉血や下剤を過激な療法として斥けたのは、英国のボディントン
(George Bodington, 1799-1882)だった。彼はその著書『肺病の
手当てと治療に関する論文』(*An Essay on the Treatment and Cure of
Pulmonary Consumption*, 1840)の中で、閉ざられた部屋より、清
浄な外気の方が肺の健康に効果があることを説いた。たとえばそ
れは、枢機卿ニューマン(Cardinal John Henry Newman, 1801-90)
の説いた、換気が人間を道徳的にするという考えの基盤を成した
ものかも知れなかった。⁽¹¹⁾ ボディントンの設立した施設は失敗に帰
したが、一八五九年にドイツで開設されたサナトリウム(sanatorium)
の先駆を成すものであった。⁽¹²⁾

ルイの、統計学的方法による瀉血に対する批判や、酸素の発見
による大気療法といった新しい療法が導入されるに及び、このお
ぞましい治療法は、十九世紀後半には次第に廃れていった。⁽¹³⁾ 今日、
この療法の名残を、理髪店の前にしばしば立っている赤と青の回
転する筒状の広告灯に見ることができる。それは、まだ床屋が外
科医を兼ねていた時代に彼らが主に瀉血を施したことに由来する
もので、赤は動脈血、青は静脈血、白は包帯を象徴している。そ
のことを知れば、そうした看板灯がぐるぐる回る時、かつて無益

に流された夥しい健康な血を思わざるをえない。

ローマのスペイン階段の横の部屋で、キーツは日々衰えていった。キーツは、かつてハムステッドでファニーの隣りに暮らして、咯血した直後の養生にとめていた時、「ファニーに寄せる頌歌」(Ode to Fanny)を書いたが、その最初の二行は、こうなっている。

医者である自然よ、私の精神に瀉血を施しておくれ

ああ、私の心から詩心を除いて、憩いを与えておくれ、

Physician Nature, let my spirit blood!

(111B)

Oh, ease my heart of verse and let me rest:

それはちよとど、身体に宿った悪い血を抜くように、精神に宿って自分を苦しめている詩心を抜き取って欲しい、ということなのだろう。悪い血が身体の調和を崩したように、詩心は魂を蝕んでいたのかも知れなかった。

もう長い間、紙に向かって詩を書くことになくなっていったキーツは、瀉血だけは確実に施され、腸結核のためもあった、日々衰弱していった。キーツは自分の死期を悟っていたのか、死の約三カ月前、一八二〇年十一月三十日に、彼の絶筆となったブラウン宛の手紙にこう書いている。

私の真の生活は終わって、死後の存在を過ごしているのだという気がいつもします。

同じ手紙の中でキーツは、肺病で死んだ弟トムによく似ている妹が、自分の想像の中で幽霊のように歩き回っていると書いて、家族への愛と肺病による死の予感が彼を苦しめていたのが分かる。

そうしたキーツの、苦痛と苦悩に満ちた時は、一八二一年二月二十三日に終わった。最初の咯血から一年と二十日だった。ロンドンから行動を共にし、献身的に看護した友人のセヴァンは、三月六日の手紙にこう書いた。

……彼は言った——「今まで誰かが死ぬのを見たことがあるか」

「いや」——「そうか、可哀想なセヴァンよ、お前を憐むよ……」

——私はもうすぐ静かな墓地に横たえられる——何てことだ、静かな墓地とは——ああ、僕は僕の上にのった冷たい土を感じることが出来る——僕の上に生えるひなぎくを……」 (イ)

二日目の日曜日に、イタリア人外科医と一緒に、クラーク博士とルビー博士が解剖をし、考えうる限り最悪の肺病と思われる——両肺とも完全に破壊されていた——細胞はいかれていた。

(ロ)

私は、私がこうむった疲労と苦痛のために病氣だった——哀れなキーツの思い出が恐ろしくとりついている——彼がいつも目にちらつくのだ……—これら残酷なイタリア人達は、彼らの恐ろしい作業をほとんど終えようとしている——彼らは家具をすべて焼却したし——そして今、壁を剝がしている——新しい窓を造りつけている——新しい扉も——そして、新しい床さえも——これらの法律に伴うすべての悲惨さが分かるだろう。^(二七)

(八)

肺病患者のいた部屋の家具を焼いたり、漆喰しゆくいを剝がしたり、床をめくったりすることは、当時イタリアやスペインといった南欧の国々ではごく普通の処置だった。北欧では、長い間、結核菌が発見されてからさえなお、肺病遺伝説が有力であったのに対し、南欧では伝染説がはるかに有力だったからである。

この遺伝説と伝染説の対立には長い歴史がある。ギリシャ時代の医聖ヒポクラテスは、肺病についての詳細な記述を残したにも拘らず、伝染を信じなかった。同じ頃、イソクラテスは、病毒の伝染を信じていた。一五四六年にはイタリアのフラカストロが、病芽(seminalia)によって伝染するという説を発表していたし、また英国のマーテンは微生物(animalcula)を想定し、肺病伝染の可能なメカニズムについて論じていた。しかし、南欧で肺病の

伝染説が認定されていたことは、肺病に関して法的に厳しい規定が課せられていたことに如実に示されている。

一六九九年、イタリアのルッカ共和国が、世界で最初の肺病予防法を制定している。^(二八)

一七五一年、スペインのフェルディナンド六世(Ferdinand VI)は、肺病患者および死者のすべての遺品(衣類、寝具を含む)の焼却および病人のいた部屋の壁の塗り替え、床の張り替えを命じた。また、患者の届出を規定し、それを怠った医者には罰金を課した。スペインでは、肺病はベストと同じように厳しい取扱いを受けたのである。^(二九)

一七五三年、フィレンツェでも同様の肺病予防法が公布されたが、一七八二年、ナポリのフィリップ四世(Philip IV)は、もっと厳重な規則を公布した。そのおおよその内容は次のようなものである。

- 一、肺病患者の届出の義務。違反者罰金。
 - 二、患者部屋の衣類目録作成、死後その保存の確認。違反者はガレー船か禁錮刑。
 - 三、未汚染家具の洗浄、汚染家具の焼却。
 - 四、家屋内の漆喰をすべて新しくすること。
 - 五、貧しい患者の入院措置。その他。^(三〇)
- こうした規則が厳しく実行されていたことは、キーツの死の部

屋に対して行われたことを想起すればよい。人々は、このイタリ
アで百二十年の歴史を持つ法律に忠実であった。それはスペイン
でも同様のことだった。重症の肺病患者シヨバン (Frederic
Francois Chopin, 1810-49) がマジョルカ島で手酷い扱いを蒙っ
たとしても、決して不思議なことではなかった。⁽¹¹¹⁾

キーツは、母も弟も共に肺病で喪い、彼らの死の床で親しく看
病にあたった。叔父二人も同じ病に斃れていることから、恐らく
肺病は母方の家系からの伝染であったのだろう。家庭内伝染のひ
とつの典例がここにある。あるいは当時の英国に広く行きわた
っていた肺病遺伝説に従うのなら、肺病そのものがキーツ家で
遺伝したのか、肺病体質を受け継いだのだった。いずれにせよ、
彼は医学を習得していたし、この病気の恐ろしさを知悉していた
ために、またおそらくは激しい詩人の想像力を持っていたために、
人一倍恐怖に戦いたことが分かる。すでに見たように、当時医学
はなお肺病の病理を説明しておらず、治療法は古代ギリシャ、ロ
ーマの伝統を受け継いでいた上、中世以来の迷信もなお根強かつ
た。死は、不可避に近かったために、肺病は確かに死刑執行令状
に等しかった。

死と言えば、キーツはすでに十九歳で死への思いを詩に託して
いたのだった。

人生が夢にしかすぎず、至福の光景が幻影として過ぎゆくとき
死は眠りたりえるのか
うつろう喜びは幻と見え
なおわれらは死ぬことこそ最大の苦痛と考える

Can death be sleep, when life is but a dream,

And scenes of bliss pass as a phantom by?

The transient pleasures as a vision seem,

And yet we think the greatest pain's to die.⁽¹¹¹⁾

キーツの訃報に接したシェリーは、長篇詩「アドネース」
(Adonais) を書き、その前文には、キーツが肺病で死んだこと、
またその墓地が周囲を遺跡で囲まれた開けた空間にあり、冬には
すみれやひなぎくで埋まること、それゆえ、そんな素敵な場所に
埋められることを思えば、死を愛するようになれるかも知れない
と言っている。⁽¹¹²⁾ 自分の遺体の上のつた土に咲きほこるひなぎく
を生前から感じていたキーツの横に、しかし、シェリーもまた身
を横たえにやって来た。

彼は、キーツの死の翌年の一八二二年七月八日、ヨットに乗っ
ていて遭難し、キーツの詩集をポケットに入れたままの溺死体と

して発見された。シエリーは、キーツの葬られたローマ郊外のプロテスタント墓地に埋葬され、墓碑銘には、「心の中の心」(Cor Cordium)と刻まれたが、キーツの墓碑銘がかれの死に少なからぬ意味を与えたと考えるのは、穿ち過ぎた見方であろうか。

Here lies one whose name was writ in water. (1118)

キーツを看護し、その死を看取ったセヴァンは、その後もローマに残り、その猷身ゆえに英国人達に愛され、半世紀以上も後の一八七九年に死んで、キーツの横に葬られた。

しかし、キーツを愛する人々にとつて認め難い論議が近年盛んになっている。それは、『エンディミオン』を書いていた一八一年友人を訪れて一カ月ばかりオックスフォードに滞在した時、性病に罹ったという問題である。十月二十八日付の、その友人宛の手紙には「私の摂った少量の水銀(Mercury)は私の毒を癒し、私の健康を増進させた」と書かれ、他に「一八一八年九月二十一日付の手書きに「これは結局、水銀による神経過敏だろう」とあるので、水銀を使用したことは間違いがない。すでに、最初の薬学者と言われているローマ時代のディオスコリデス(Dioscorides, 40-90)が著した『マテリア・メディカ』(Materia Medica, 777)にその記述が見られ、十六世紀にパラケルススによ

って梅毒の治療剤として強く推奨された水銀は、十九世紀初頭まで病気に無関係に処方されていた。

ちょうどキーツが水銀を摂取した頃、ロンドンの医学界ではこの薬品に関する取扱いで議論が持ち上がっているところだった。彼が、梅毒にかかっていたにせよ、あるいはもつと軽微な淋病(gonorrhoea)であったにせよ、水銀中毒で死んだとは考え難い。すでに見たように、死後の剖検が両肺の完全な病状を確認しているからである。

今ここでは、むしろ、肺病の治療剤として使用された水銀、水銀剤を見ておこう。使われたのは主に下剤としてで、甘汞(塩化第一水銀、calomel)、あるいは昇汞(塩化第二水銀、corrosive sublimate)が用いられ、他に塗り薬として関節の慢性の腫れなどに使用された。十七世紀にモートンは、肺病患者には水銀剤で唾を出させること(mercurial salivation)を勧め、進んだ症状には甘汞による穏やかな通じをつけるよう処方した。またフーフェラント(Christoph Wilhelm Hufeland, 1762-1836)は一七九七年の本の中で、水銀こそ瘰癧の最も効果ある薬剤のひとつである、と説いている。

〈註〉

- (一) シーガル(小山昌生訳)『巨匠のモデル』一七〇—一八四頁。
The Pre-Raphaelites, Tate Gallery, 1984, pp. 96-98.
- (二) 前半は、ヴィオレット・ハントの『ロセッティの妻』より、後半はウィリアム・ガウントの引用。いずれも、岡田隆彦『ラファエロ前派、愛と別離の軌跡』『芸術生活』第二八巻五号、昭和五〇年、四〇—四五頁。
- (三) ラスキンは一八四八年グレイ嬢と結婚したが、一八五四年離婚。翌年彼女は画家ミレーと結婚している。ラスキンはその後生涯を独身で通した。
- (四) ロセッティは七年後にその詩稿を掘り出して一八七〇年詩集として発表した。わずかにその一頁には、人を感嘆させたまばゆいシッダルの赤毛が絡みついていたということである。(シーガル、前掲書、一八一頁。)
- (五) Dubos, R. and J. *The White Plague*, p. 57.
- (六) それは男女間の問題だけでなく、世の中で美しく目立ちたいという意識に基いているのだろうか、ここでは深く論じない。しかし、すでに十六世紀、モンテーニュ(Michel Eyquem de Montaigne, 1533-92)がその卓抜な『随想録』(*Les Essais*)で美しくなろうとする女達の涙ぐましい努力を描いている。
- 「皮膚を新しくして、一段とみずみずしい肌になりたいばかりに皮膚をむかせた女のことはバリでは誰でも聞いていたろう。声をやわらかくならぬために、あるいは、歯並みを美しくするために、生きた健康な歯を抜いてもらう女もある。女達の
- このような苦痛をものともしない例をわれわれはどれほど多く知っていることか。……(中略)……私は、顔色を蒼白くするために砂や灰を飲み、わざと胃をこわすことに苦勞する女たちを見たことがある。」(原二郎訳、第一巻一四章、四一頁)
- (七) 名称の由来は、詩人キーツがラファエロ以前のイタリアの画家、たとえばジオット(Giotto di Bondone, 1276?-1337)やボッティチエリ(Sandro Botticelli, 1444?-1510)達の方がラファエロより秀れていると指摘しているのにロセッティが共鳴したところからくる。また十九世紀初頭にウィーンで結成された宗教的な志向をもつ「ルーカス同盟」(「ナザレ派」とも呼ばれた)からも刺激を受けた。
- 当初、ロセッティ、ミレー、ハントの三人が、当時のアカデミックな画風を嘲笑したところから、ロセッティの弟(William Michael Rossetti, 1829-1919)彫刻家ウルナー(Thomas Woolner, 1835-1892)画家コリンソン(James Collinson, 1825-1881)さらにステイヴンス(Frederic George Stephens, 1828-1907)を加えて七人のグループとなる。
- 他に、ブラウン(Ford Madox Brown, 1821-1893)ヒューズ(Arthur Hughes, 1832-1915)バーン・ジョーンズ(Edward Coley Burne-Jones, 1833-1898)モリスらはこのグループの仲間として論じられることが多い。
- (八) 斎藤勇『John Keats』八五—八六頁。
- この版画は、十四世紀イタリアの代表的フレスコ壁画『死の勝利』(ピサのカンポ・サントにある)のカルロ・ラシニオによる銅版画複製画集。(岡田隆彦『失われた神話と自然を求めて』(特

集「ヴィクトリアンの愛と詩」前掲の『芸術生活』同号)三三三頁。

ハントは後にキーツの詩「聖アグネスの夕」(Eve of St. Agnes)から題材を取った「マタリンとボルフィロの逃亡」(Flight of Madeline and Porphyro, 1848)とどう絵を描いてゐる。

(九) デュボス(田多井吉之助訳)「健康という幻想」一八六頁。

(一〇) ホイジンガ(堀越孝一訳)「中世の秋」二二六八頁。

(一一) Arles, Philippe : (tr. by Helen Weaver) *The Hour of Our Death*, pp. 106-121.

この頃また、「死することの術」(善終心得 [artes moriendi])が流行していて、文と絵の両方からその意味を汲むことができた。

死の説話は、十三世紀のフランスの教訓文学の中に「三人の生者と三人の死者」として現われる。その造型美術の中の「死」の形象化は、ピサのカンポ・サントの壁画で「死の勝利」と題されている。(小堀桂一郎「芸術に現われた「死」の姿」、日本文化会議編『日本美は可能か』所収、一〇三—一〇九頁。)この壁画の銅版画による複製画集をキーツが見、やがてそれをハントが見てPRB集結の機縁となったことはすでに述べた。(註八参照。)

(一二) ロマン主義とは何かについての定義は困難を極める。「感傷的な憂鬱」(フェルプス)、「中世の生活と思想の再興」(ハイネ)、「現実からの逃避」(ウォーターハウス)、「ロマン主義はいかなる時代においてもその芸術であり、古典主義は過ぎし日の芸術である」(スタンダー)と数多く並べてもほとんど確定し難い。

(Furst, L. R. *Romanticism*, pp. 1-4)

またそれは国によって成立の事情、時期、意味が必ずしも一致しないことに注意を要する。

(一三) 一八三七年、カーライルの造語であろうと言われている。ドラ

イザン(John Dryden, 1631-1700)やポープ(Alexander Pope, 1688-1744)がその主流を成した。

(一四) 斎藤勇、前掲書、二五九—二六〇。

(一五) 完全なタイトルは、*The Complaint: or Night-Thoughts on Life, Death and Immortality* 最初の四つの「夜」は一七四二年、五番目は一七四三年、六、七番目は一七四四年、八、九番目は一七四五年。フォリオ版はブレイクのデザインにより一七九七年に出た。

(一六) ドイツでのヤング熱は一七六〇年代に始まり、彼の死に際しては、クロップシュトック(Klopsstock)が詩を書き、ドイツ人はヤングをミルトンの上位に置いた。フランスではデイドロ、ロベスピエールも愛読し、マダム・ド・スタール、シャトブリアン、ラマルティエヌにも称賛を受けた。

フランス人の中には、ヤングこそが「世紀病」(mal du siècle)を發明したと考える者がある。(アルベール・ベガン(小浜俊郎・後藤信幸訳)『ロマンの魂と夢』二二六頁。Jones, Howard Mumford. *Revolution & Romanticism*, pp. 92-95. DNB, Vol. XXI, pp. 1283-1289)

ノヴァーリスの「夜の讃歌」(Hymnen an die Nacht, 1797)がヤングの影響を受けたかどうかは不明。恋人ゾフィーの死を機縁としているが、光と昼とに背を向けて、夜と闇とに「無限の眼」を得る思想、肉体を離脱した死の状態が却って真の生であると見る思想で両者は相似通っている。また究極的にキリスト教礼賛になっている点でも。(村上至孝「英国浪漫主義の黎明」一〇九—一〇頁。)

- (一七) グレイは自らが「白い憂鬱」に襲われていると言い、その詩句はしばしば墓碑銘として用いられた。(斎藤勇、前掲書、二八九頁。) この『墓碑の悲歌』は明治十年代から日本で訳され人口に膾炙した。横浜の外人墓地人口の門柱に英日両国語で詩の引用が彫られている。明治二十六年の増田藤之助の訳である。(磯田光一、『イギリス・ロマン派詩人』三八―三九頁。)
- (一八) Hume, David, *A Treatise of Human Nature*, Book II, Part III, Section III, p. 127.
- (一九) 原題は 'Reliques of Ancient English Poetry consisting of old heroic ballads, songs, and other pieces of our earlier poets (chiefly of the lyric kind) together with some few of later date'. またパーシーは 'アイズラント語による『ラグナー・ロドボルクの死の歌』(Death-Song of Ragnar Lodbrok) を訳した『ルーン詩の五篇』(Five pieces of Runic Poetry, 1763) がある。(斎藤勇、前掲書、二八五頁。)
- (二〇) 村上不二雄「イギリスの詩歌」(『英米文学史講座』第五卷「十八世紀Ⅰ」四二―四六頁。)
- (二一) Wordsworth, William, 'Resolution and Independence' from Hutchinson (ed.), *Wordsworth — Poetical Works*, p. 155.
三、四行目はやはり若くして肺病に倒れたスコットランドの詩人パーシズを示している。
- (二二) 川村泉『Chatterton』(研究社英米文学評伝叢書二八巻) 八二―八五頁。
- (二三) Tate Gallery, *The Pre-Raphaelites*, pp. 142-144. (以下の記事は同書。)
- チャタートンの若い頃のポートレートがないので、作家のメレディス (George Meredith, 1828-1909) がモデルになった。またこの絵はブルック街三九番地の彼が自殺したその部屋で製作されたというが、真偽のほどは不明である。
- (二四) また、フランスのロマン主義作家ヴィニー (Alfred de Vigny, 1797-1865) は『チャタートン』(Chatterton, 1835) という戯曲を書いている。
- (二五) 川村泉、前掲書、二二三―二三三頁。
- (二六) Hypsaenus Stobaios, *Florilegium*, CXX, 13
- (二七) マルセル・サンドライユ (中川米造、村上陽一郎監訳) 『病の文化史』(上) 一〇―一一頁。
- (二八) 斎藤勇、前掲書、二二三頁。洗礼が与えられたのは同じ年の十二月十八日の事だった。生まれた場所も明確でない。それは祖父(母方)の経営していた貸馬車屋の教区外で洗礼を受けたからである。
- (Gittings, Robert: *John Keats*, p. 15)
- (二九) Rollins, Hyder E. (ed.), *The Letters of John Keats*, 1814-21, vol. 1, pp. 310-316.
- (三〇) Gittings, R., *op. cit.*, pp. 26-27.
- (三一) Bate, W. J., *John Keats*, pp. 19-20.
- (三二) Allot, Miriam (ed.), *The Poems of John Keats*, Longman, 1970, p. 120.
- (三三) *Ibid.*, p. 418, ll. 26-28.
- (三四) *Ibid.*, pp. 673-674, ll. 256-262.
- 「Bright is bright」は極端で恐ろしい顔の白さ whiteness を示しており、百合と雪と同じように白いと言っているのだが、それ自体の

意味は輝きや生命を示しており、衰えや死への行進と反対の状況
 である。(Robin Mayhead's discussion quoted in Barnard, John (ed.),
John Keats : The Complete Poems, p. 680.)

- (三五) Rollins (ed.) *op. cit.*, vol. II, p. 4.
- (三六) *Ibid.*, vol. II, p. 123.
- (三七) *Ibid.*, vol. II, p. 13.
- (三八) *Ibid.*, vol. II, p. 81.
 一八一九年三月十九日ジョージ・キーツ夫妻宛の手紙の一部。
- (三九) 斎藤勇、前掲書、一二二頁。
- (四〇) プリニウス、またアレタエウス (Aretaeus) も海上航行が肺癆に
 効くことを唱導している。(Adams, F., *The Extant Works of Aretaeus*,
 pp. 478-9, quoted by Keers, R. Y., *Pulmonary Tuberculosis*, pp. 13-4.
- (四一) Keers, R. Y., *op. cit.*, p. 67.
- (四二) Hilton, T., *op. cit.*, p. 102.
- (四三) キーツは一八一五年十月から医師免許を取得するためにガイ病
 院 (Guy's Hospital) で六カ月間訓練を受けた。
- (四四) Allot (ed.), *op. cit.*, pp. 526-527, II, 23-28.
- (四五) デイルナ (Charles Wentworth Dilke, 1789-1864) とブラウン
 (Charles Brown, 1786-1842) によって一八一五—一六年の冬に
 建てられたウェントワース・プレース (Wentworth Place) に滞在
 してゐた。
- (四六) Allot (ed.), *op. cit.*, p. 645, II, 229-230.
- (四七) リチャーズ (岩崎宗治訳『科学と詩』一七頁)。
- (四八) Allot (ed.), *op. cit.*, p. 529, II, 51-56.
- (四九) *Ibid.*, p. 524.

ナイチンゲール(小夜啼鳥)は、ひたき科づくみ属の小鳥で、
 多く夕方から夜更けにかけて美しい声で鳴く。死者のためのミサ
 曲を歌う鳥と信じられていた。

西欧における詩では、ホメロス以来、キーツ、スウィンバーン、
 ヴェルレーヌ、エリオットなどに見られるが、この鳥は悲しみと
 絶望と共に語られることが多い。

散文では、オスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) の
 童話『小夜啼鳥と薔薇』(The Nightingale and the Rose) が興味深
 い。ある男が王子の主催する舞踏会に女の子を連れて行く予定な
 のだが、彼女は夜会服に合う赤い薔薇を所望する。それが見つか
 らず絶望している男を見て、鳥は「これこそ真の愛する人だ」と
 感じる。「彼の唇は彼の望みの薔薇のように紅いが、彼の情熱は
 彼の顔を蒼白い象牙のようにし、悲しみは彼の額に彼女の刻印を
 押しつけた」。結局白薔薇の棘が小鳥の胸を刺して血を抜いている間
 ずっと歌っているという条件で白薔薇を紅く染めて彼の願望を満
 たそうとする。舞踏会の日に間に合い、小鳥は息絶える。しかし、
 女は薔薇が自分のドレスに合わないと言い、別の人が宝石をくれ
 たと言って男の誘いをすげなく断わってしまう。ここには、血が
 出るまで歌い続けるという小夜啼鳥にまつわる伝説と、紅い花、
 恋の情熱、蒼白の青年、小鳥の死、と肺病にまつわるイメージが
 見事に散りばめられていると言えよう。

- (五〇) *Ibid.*, p. 532, II, 79-80.
- (五一) Rollins (ed.), *op. cit.*, Vol. II, p. 133.
 (To Fanny Browne, 25 July 1819)
- (五二) Brown, Charles Amitage, *Life of John Keats*, quoted by Bate, *op.*

- cit., p. 636.
- (五三) 原題は *Traite de l'Auscultation Mediate*。フォーブスの英訳名 *A Treatise on Diseases of the Chest and on Mediate Auscultation*。レネックは改訂版を一八三三年、甥が三版を一八三二年に出版。一八四六年にその英訳が出た。
- (五四) Rollins (ed.), *op. cit.*, Vol. II, p. 251. (To Fanny Keats, 6 February 1820)
- (五五) *Ibid.*, p. 253. (To Fanny Keats, 8 February 1820)
- (五六) 化学的発見について。一七七一二年スウェーデンの化学者シェーレ (Karl Wilhelm Scheele, 1742-1786) によって酸素が発見され、英国のプリーストリー (Joseph Priestley, 1733-1804) ならびにフランスのラヴォアジエ (Antoine Laurent Lavoisier, 1743-1794) がその存在を確認した。一八四二年にドイツのリービヒ (Justus von Liebig, 1803-1873) が食物に炭水化物、脂肪、蛋白質、塩類の四栄養素がある事を発見している。つまり、まだ人間の健康な生活に必要な栄養という発想がなかったことが、こうした食事制限を助長したのであろう。
- (五七) Keers, R. Y., *op. cit.*, pp. 65-66.
- (五八) 岡西順二郎『結核の歴史』『日本臨床結核』(四四) 五九二頁。
- (五九) アンドレ・モーロア (大野俊一訳)『バイロン伝』一七八一—七九頁。
- “That beautiful pale face is my fate.”
- (六〇) Meyers, Jeffrey, *Disease and the Novel: 1880-1960*, p. 5. たとへば、『ドン・ジコマン』(Don Juan, D) の中にも見られる。
- (六一) Marchand, Leslie; *Byron: A Biography*, quoted by Meyers, Jeffrey,

- op. cit.*, p. 5.
- (六一) *Ibid.*, pp. 1-2.
- (六三) ロンブロンゾ (辻潤訳)『天才論』三三頁。
- (六四) 同前、二四—二四二頁。
- (六五) Marten, B., *A New Theory of Consumptions more especially of a Phthisis or Consumption of the Lungs*, (1720), pp. 1-11, quoted in Keers, R. Y., *op. cit.*, p. 28.
- (六六) 病気では、キーツ (二五歳)、『バイロン』(三六)、『シェーベルト』(三二)、『プロンテ姉妹シャロット』(二九)、『エミリー』(三〇)、『アン』(二九)、『ノヴァーリス』(二九)、『狂気では、ジョン・クレア』(五九)、『レナウ』(四七)、『ヘルダーリン』(三三)、『自殺では、前出のチャタートン』(一八)、『クライスト』(三四) 等があげられる。
- (六七) Gregory, S., *Orglimes*, XIV, ロンブロンゾ, 前掲書, 四一頁。
- (六八) 同前, 四一頁。
- 痩せていることと蒼白の両方の特質を持っていたヴォルテールについて、ロンブロンゾはこう記している。
- 「ヴォルテールは非常に痩せ削けていた。彼の痩せて曲った身体を見ると薄い透き通る面紗の様であった。彼の天才が透き通って見えそうに思われたと、セギユールが書いている。」(四二頁。)
- (六九) それは古い諺「健全な身体に健全な精神」(A sound mind in a sound body, Mens sana in corpore sano) に反する例のように思われるが、芸術活動がそもそも健全な精神を示すことなのかどうかという問が残る。それゆえ、「すぐれた精神はしばしば虚弱な病体に宿る」とでもすればよいかも知れない。ロンブロンゾは、蒲柳の質の人メイヌ・ド・ピランの病気が天才に及ぼす影響について

- cit., p. 636.
- (五三) 原題は *Traite de l'Auscultation Mediate*。フォーブスの英訳名 *A Treatise on Diseases of the Chest and on Mediate Auscultation*。レネックは改訂版を一八三三年、甥が三版を一八三二年に出版。一八四六年にその英訳が出た。
- (五四) Rollins (ed.), *op. cit.*, Vol. II, p. 251. (To Fanny Keats, 6 February 1820)
- (五五) *Ibid.*, p. 253. (To Fanny Keats, 8 February 1820)
- (五六) 化学的発見についで。一七七二年スウェーデンの化学者シェーレ (Karl Wilhelm Scheele, 1742-1786) によって酸素が発見され、英国のプリーストリー (Joseph Priestley, 1733-1804) やらにフランスのラヴォアジエ (Antoine Laurent Lavoisier, 1743-1794) がその存在を確認した。一八四二年にドイツのリービヒ (Justus von Liebig, 1803-1873) が食物に炭水化物、脂肪、蛋白質、塩類の四栄養素がある事を発見している。つまり、まだ人間の健康な生活に必要な栄養という発想がなかったことが、こうした食事制限を助長したのであろう。
- (五七) Keers, R. Y., *op. cit.*, pp. 65-66.
- (五八) 岡西順二郎「結核の歴史」『日本臨床結核』(四四) 五九二頁。
- (五九) アンドレ・モーロア (大野俊一訳) 『バイロン伝』一七八―一七九頁。
- “That beautiful pale face is my fate.”
- (六〇) Meyers, Jeffrey, *Disease and the Novel: 1880-1960*, p. 5. たとえは『ケン・ジトマン』(Don Juan, 1) の中にも見られる。
- (六一) Marchand, Leslie; *Byron: A Biography*, quoted by Meyers, Jeffrey, *op. cit.*, p. 5.
- (六二) *Ibid.*, pp. 1-2.
- (六三) ロンブロンゾ (辻潤訳) 『天才論』三三頁。
- (六四) 同前、二四―二四二頁。
- (六五) Marten, B., *A New Theory of Consumptions more especially of a Phthisis or Consumption of the Lungs*, (1720), pp. 1-11, quoted in Keers, R. Y., *op. cit.*, p. 28.
- (六六) 病気では「キーツ (二五歳)」、バイロン (三六)、「シェーベルト (三二)」、「ブロンテ姉妹シャーロット (二九)」、「エミリー (三〇)」、「アン (二九)」、「ノヴァーリス (二九)」、狂気では、「ジョン・クレア (五九)」、「レナウ (四七)」、「ヘルダーリン (三二)」、自殺では、「前のチャタートン (一八)」、「クライスト (三四)」等があげられる。
- (六七) Gregory, S., *Orgitones*, XIV. ロンブロンゾ、前掲書、四二頁。
- (六八) 同前、四二頁。
- 瘦せていることと蒼白の両方の特質を持っていたヴォルテールについて、ロンブロンゾはこう記している。
- 「ヴォルテールは非常に痩せ削けていた。彼の痩せて曲った身体を見ると薄い透き通る面紗の様であった。彼の天才が透き通って見えそうに思われたと、セギュールが書いている。」(四二頁。)
- (六九) それは古い諺「健全な身体に健全な精神」(A sound mind in a sound body, Mens sana in corpore sano) に反する例のように思われるが、芸術活動がそもそも健全な精神を示すことなのかどうかという問が残る。それゆえ、「すぐれた精神はしばしば虚弱な病体に宿る」とでもすればよいかも知れない。ロンブロンゾは、蒲柳の質の人メイヌ・ド・ピランの病気が天才に及ぼす影響につい

述べているところを引用している。「人はみな大概丈夫だから存在の観念などはわかりはしない。人は苦しまなければ自分のことを考えないものだ。だから病氣と反省の習慣とがただ人をすぐれたものにすることができる。」(二四一頁。)もち論この考え方として病氣の正の面のみ強調し過ぎていいることはいなめない。

- (七〇) McFarland, 'Thomas, Romanticism and the Forms of Ruin', pp. 14-15.

ギリシヤに対する興味は考古学、とりわけポンペイの発見によって深化した。一七三四年に創立された「好事家協会」(The Society of the Dilettanti)の人々は教育があり、グラランド・ツアーを好み、考古学に強く魅惑されていたので廃墟を見学することを忘れなかった。

こうした廃墟は人間と帝国のうつろいを強調し、画家や版画家達はローマおよびその周辺に殺到し、創作に励んだ。古典的な建物や朽ちた水道橋の絵を載せた本がエリート達の間でよく売れた。遺跡の発掘は十八世紀から十九世紀にかけてさかんに行われ、トーマス・グレイやウォルポール(Horace Walpole, 1717-1797)、ゲーテらが、それらの発見について書いた。

- (Jones, H. M., *op. cit.*, pp. 146-148)
- (七一) 斎藤勇、前掲書、二九五頁。
- (七二) ルネ・デュボス、前掲書、四三、一八六頁。
- (七三) Hutchinson (ed.): *The Complete Poetical Works of Percy Bysshe Shelley*, p. 577.
- (七四) Allot (ed.), *op. cit.*, p. 651.
- (七五) Rollins (ed.), vol. II, p. 167. (To J. H. Reynolds, 21 September

1819)

この言葉のすぐ後に、「私はいつもなぜか秋とチャタートンを連想します」と書いている。アロットの詩集への註釈によれば、チャタートンの『アエラ』(Aella, 1777)の影響が見られる部分がこの詩にはあるという。

- (七六) Rollins (ed.), *op. cit.*, vol. II, p. 261.
- (七七) *Ibid.*, p. 264.
- (七八) *Ibid.*, p. 277.
- (七九) *Ibid.*, p. 306.
- (八〇) 斎藤勇、『イギリス文学史』三四〇—三四七頁。
- (八一) 英国におけるコスモポリタン革命派としてバイロンとシェリーをあげることができる。シェリーの方がより過激であったが、ヨーロッパ全体への影響は、その生存中も死後もバイロンの方がはるかに大きかった。(Jones, H. M., *op. cit.*, p. 288.)
- (八二) Hutchinson (ed.), *op. cit.*, Julia and Maddalo, l. 57, p. 191.
- (八三) グラランド・ツアーには、ドイツやオーストリアは含まれないのが普通だった。宿屋や道路が悪いという定評のためでもあり、また、フランスやイタリアに比べて文化的に二流国だという評価が下されていたからでもあろう。ジョンソン博士は、「イタリアに行ったことがない人間は、当然見るべきものを見ていないという劣等感につねに悩まされる」と告白している。(本城靖久『グラント・ツアー』四一六頁。)
- (八四) Rollins (ed.), *op. cit.*, p. 310.
- (八五) Clarke, Charles Cowden, *Recollections of Writers* (1878), p. 151, quoted by Rollins (ed.), *op. cit.*, p. 323n.

- キーツがイタリヤに着いた頃、シェリーはハント夫人に、彼がどこにいるかを尋ねる手紙を出している。「私は彼の身体と魂の両方の医者になろうと思います。……実際私は、私をずっと引き離してしまうであろう好敵手をはぐくんできると、少しは気付いてます。」(Shelley, *Complete Works*, Ingpen and Peck (ed.), vol. X, p. 212.)
- (八六) Rollins (ed.), *op. cit.*, p. 321, To Charles Brown, 14 August 1820.
- (八七) Gittings, *op. cit.*, pp. 412-416.
- (八八) コットレル嬢もやはり肺病のために一八二五年以前にナポリで没したと言われている。彼の兄(恐らくは元海軍士官のチャールズ・コットレル Charles Edward Cotterell) はキーツ一行の面倒を、やがて彼らが到着するナポリでよく見たらしい。(Rollins (ed.), *op. cit.*, p. 349, 353-4.)
- (八九) Rollins (ed.), *op. cit.*, p. 339, Joseph Severn to William Haslam, 19 September 1820.
- (九〇) 岡西順二郎「結核の歴史」(四九) 八一頁。
- (九一) プリーストリーは一七七五年に、「脱フロギストン空気」についての研究を発表したが、それより早く一七七二年にスウェーデンの化学者シェーレ(Karl Wilhelm Scheele, 1742-1786) が酸素を「火の空気」とよんでいた。プリーストリーと同じ年にフランスのラヴォアジエ(Antoine Laurent Lavoisier, 1743-1794)の酸素の存在に関する論文を発表したが、前年偶々パリに来たプリーストリーから話を聞いていたことが判明し、批判された。彼は、一七九四年王制に与していたという理由で起訴され、断頭台の露と消えた。(川喜田愛郎『近代医学の史的基盤』(上) 四六五―四六九頁。)
- (九二) 検疫。この制度は、東方貿易の門戸ヴェネツィアが西暦九〇〇年から一五〇〇年の間に六三回のペスト侵入を記録した苦い経験から、一三七四年に三十日間の検疫停船期間が設けられ、一三八三年マルセイユでも四十日間(イタリヤ語で *quarantina*)の検疫が実施されるようになった。直接の理由としては、一三四八年のペスト黒死病来襲があげられるだろう。
- (九三) Rollins (ed.), *op. cit.*, p. 352.
- (九四) クラーク医師は、アバーディーン大学を出て、一八一七年エディンバラ大学から医学博士号を授与されている。同じ年、彼は肺病患者を南仏へ、それからスイスへ連れて行って、気候の効果に関する観察を行った。一八一九年にローマに定住し、そこへキーツがやって来たのである。一八二〇年には *Notes on Climate, Diseases, Hospitals, and Medical Schools in France, Italy, and in Switzerland* を発刊し、一八二六年にはロンドンで開業。レオポルド王子、ケント公爵夫人、後にヴィクトリア女王の侍医となる。一八二九年に *The Influence of Climate in the Prevention and Cure of Chronic Diseases* を刊行。初期肺病には船旅を、後には温和で変化の少ない気候を勧めている。一八三七年、ヴィクトリア女王によって准男爵に叙せられた。
- (九五) Rollins (ed.), *op. cit.*, vol. II, p. 358.
- (九六) Flick, *Development of Our Knowledge of Tuberculosis*, p. 81, 99, 142.
- たとえばモートンは、その『肺癆学』の中で次のように書いている。「心のやっかいな情熱、とりわけ、恐れや悲嘆、怒り、考

- え過ぎ、孤独、時期外れの長い研究」(九九頁)。
- (一九七) Rollins (ed.), *op. cit.*, vol. II, p. 129, July 1819.
- (九八) *Ibid.*, p. 264, February(?) 1820.
- (九九) モーロー、前掲書、四一七—四一八頁。
- (一〇〇) Rollins (ed.), *op. cit.*, vol. II, p. 345, 30 September 1820.
- (一〇一) *Ibid.*, p. 351, 1 November 1820.
- 以下、二〇の引用も同じ手紙からの引用。
- (一〇二) Allot, M. (ed.), *op. cit.*, p. 500.
- この「情知らずの美女」(あるいは「ひれなきたをやめ」)は、一四二四年にシャルティエ (Alain Chartier) によって書かれた同題の詩から採ったものと言われている。
- この言葉はキーツの「聖アグネスの前夜祭」(*The Eve of St. Agnes*) にも見られる。See: Praz, Mario, *The Romantic Agony*, p. 187-286.
- (一〇三) Allot, M. (ed.), *op. cit.*, p. 502-503.
- (一〇四) Fass, Barbara, *La Dame sans Merci & the Aesthetics of Romanticism*, p. 73.
- (一〇五) 『魔の山』は、トーマス・マン夫人が一九二二年に肺結核にかかって、スイスのダヴォス (Davos) にあるサナトリウムに転地した時、見舞いのためその地を三週間訪問した経験に基いている。彼は、すでに一九〇二年に『トリスタン』(*Tristan*) を書いているが、これはサナトリウムを舞台にした、人妻と作家の淡い恋情を描いた短篇で、後の『魔の山』の先駆をなす作品であった。
- (一〇六) トーマス・マン (高橋義孝訳) 『魔の山』(上) 二二〇—二二二頁。
- (一〇七) Rollins (ed.), *op. cit.*, p. 361-363, Joseph Severn to Charles Brown, 14, 17 December 1820.
- (一〇八) すでに紀元前四〇〇年のギリシャの壺に、血を抜かれている患者の図がある。アレキサンドリアの医師エラシストラートゥス (Erasistratus, C. 300-250B. C.) は、病気の主な原因は血の過剰 (plethora) と考え、飢えによる血液供給量の調節を試みた。同時代人や、彼の弟子達は瀉血を多用した。(Singer and Underwood, *A Short History of Medicine*, p. 35, 50)
- (一〇九) Haggard, Howard W., *Devils, drugs, and doctors*, p. 343.
- (一一〇) 中世になると、瀉血はますます重要な意味を持つようになって、占星術とも絡んで、諸病の治療は勿論のこと、衛生の目的で「瀉血カレンダー」に従って定期的に行われるようになった。
- 瀉血の方式も単一ではなく、ギリシャ医学では患部と同じ側の、近接部位に静脈切開 (venesection) する方式 (derivation) が、またスコラ医学では、患部の反対側の遠い部位に施す方式 (revulsio) が採用された。(川喜田愛郎、前掲書、(上) 二〇四—二〇六頁。)
- この有害な療法に従事したのが、いわば床屋 (barber) で、床屋外科医 (barber-surgeon) の起源と言われている。
- 瀉血は血を抜く方だが、逆に血を入れる事、つまり輸血 (transfusion) に関しては、一六六五年に動物同志の、一六六七年には子羊から人間への試みが行われた。
- 人間から人間への輸血は一八一八年、英国の医師ブランデル (James Blundell, 1790-1877) によるものが最初である。(Singer and Underwood, *op. cit.*, p. 698-699.)
- (一一一) 同前、五二八—五三二頁。

ブルッセルは、大部分の病気は胃腸炎 (gastritis) であり、癌も結核症と断じ、天然痘も梅毒も炎症 (inflammation) であり、癌も結核症も炎症の結果にしか過ぎないと考えた。そして、消炎療法 (antiphlogistic) として瀉血を勧めたのである。(Singer and Underwood, *op. cit.*, p. 282)

(一一二) フランスの蝨の輸入と輸出の数を見ると、いかにブルッセルの影響が深く広がったかが分かる。

Year	Importation	Exportation
1820	—	1, 157, 920
1823	320, 000	1, 188, 855
1827	33, 634, 494	196, 950
1833	41, 654, 300	868, 650
1834	21, 885, 465	868, 650

(Ackerknecht, E. H., *Medicine at the Paris Hospital, 1794—1848*, p. 62.)

(一一三) ジェーン・オースティン。肺結核と明確に断定できる最初の方に属する人だろう。彼女は、姉のカassandraとサザンプトンに寄宿制私立学校に入り、そこで二人とも化膿熱に罹って重体となったが、幸い回復した。化膿熱とは、症状から付けた名称で、当時、初感染とともに起こった粟粒結核や、奔馬性結核をそう呼ん

でいた。

一七九六年に「エリノアとマリアンヌ」(Elinor and Marianne) と『第一印象』(First Impression) を書いたが出版社から相手にされず、父の死後、各々題名を変えて、一八一一年に『分別と多感』(Sense and Sensibility)、『一八一三年に「高慢と偏見」(Pride and Prejudice) として出版され好評を博した。

寄宿学校以来、オースティンはしばしば結核の症状を示したが、一八一六年頃から健康が悪化し、一八一八年七月ウエストミンスターで死んだ。彼女は終生独身だった。

その死因はアジソン病であったと言われている。彼女の父も一八〇五年一月、三年来の病の後、突然発熱して死んだし、兄のヘンリーも発熱のある重病に罹っていた。彼らは皆結核性疾患に冒されていたのかも知れない。

アジソン病は、一八五五年 Thomas Addison (1793-1860) によって発見された結核性副腎皮質不全症。下痢、無力症、低血圧、皮膚の褐色化が特徴。

(一一四) Chapman, R. W. (ed.), *Jane Austen's Letters*, p. 325, To Cassandra Austen, 16 September 1813.

(一一五) *Ibid.*, p. 390.

(一一六) モーロフ、前掲書、五二三頁。

(一一七) 同前、五二九—五三四頁。

(一一八) 立川昭二『思い違いの科学史』一六〇頁。

(一一九) ルイはまた肺病に関するきわめて秀れた論文を書いている。彼は若い頃、六年間肺病(肺結核)の研究に身を捧げ、あらゆる症状や徴候を記録して、一八二五年に『肺病の病理解剖学的研究』

(Recherches anatomico-pathologiques sur la phthisie) を発表している。

(Singer and Underwood, *op. cit.*, p. 721-722.)

(一一〇) シュライオク (大城功訳) 『近代医学の發達』 一七二—一九、一三六頁。

(一一一) Cardinal Newman, *Apologia pro vita sua*, 1864, p. 146.

(一一二) Keers, *op. cit.*, pp. 68-69.

(一一三) 「吸血鬼」療法 (Vampirism) に反対する考えが、それ以前から無かったわけではなかった。すでに十六世紀から十七世紀にかけて、ヒポクラテス流の待期療法 (身体の機能が自らの病を癒すのを待つ医療) に戻ろうとする「流血嫌い」(Hamatophoben) が出ていた。(川喜田愛郎、前掲書、上巻二〇六頁)

(一一四) Allot, M. (ed.), *op. cit.*, p. 738.

(一一五) 死の約一カ月前のセヴァンの手紙を引く。

「一週間が経つほどに、希望がどんどん失せていきます——な
お私は怖れるにたる大きな原因があります——あの哀れなキーツ
は、今や死の床にあります——毎日、彼はさらに悪い症状を示し
ています——粘土のような痰——とても多い量です——盗汗——
身体がぞつとするほど痩せ衰えていくこと——下痢に近づいてい
る便通のゆるみと、下腹部の痛み——食物は彼の中を大変早く通
つていき、少ししか消化されていません。」(Rollins (ed.), *op. cit.*,
vol. II, p. 371. Joseph Severn to John Taylor, 25, 26 Jan. 1821.)

(一一六) *Ibid.*, pp. 359-360.

(一一七) *Ibid.*, pp. 377-379. Joseph Severn to John Taylor, 6 March 1821.
セヴァンの手紙の中では、実際にはハ——イ——(口)の順に書か
れているのを、時間の経過に合わせて並べかえた。

(一二八) Keers, *op. cit.*, p. 32.

(一二九) Meachen, *A Short History of Medicine*, pp. 67-69.

この法の概略は以下の如し。

前文—経験により間歇熱や肺病その他の伝染病で死んだ患者から、
多くの家族を守るためこの法を制定する。

一、病人は、生前、死後を問わず届け出られなければならない。
医者で一回目にこれを怠った者は、二百ダカットの罰金と一年
の免許停止。二回目は、四百ダカットと二年間の追放。他の者
は、一回目は三十日禁錮刑。二回目は四年間の要塞勤務。

二、患者の寝ていた部屋にあった物すべて、衣類、寝台用具、家
具等火に投ずること。

三、漆喰、床、天井等すべて塗り直すこと。
四、その他。

(Flick, *op. cit.*, pp. 164-166.)

(一三〇) De Renzi, *De la Medicina in Italia*, 1849, vol. 5, p. 511, quoted
by Flick, *op. cit.*, p. 169.

(一三一) ポーランド生まれのショパンが、肺病と診断されたのは、一八
三八年、愛人ジョルジュ・サンド (George Sand, 1804-76) とマジ
ョルカ島に行った時だった。彼が重症の肺病であることはすぐに
島中に知れわたり、廃屋になっていた修道院に住むことになった。
サンドの手紙を引く。

「マジョルカの気候はますますショパンに悪くなり、大急ぎで逃
げ出しました。……馬車、馬、驛馬などをもって人を十人知
っていました、だれ一人喜んで貸してくれる者はいません。こ
の旅をスプリングのない雇いの馬車でしなければならなかったの

です。……そうした不親切の原因ですか？ ショパンのせきのためです。スペインではせきが出れば肺結核だということです。肺結核患者はらい病患者と同じく、伝染病の血筋だとしています。人びとは彼を追っ払うのに石、棒され、警官が足りないというのです。というのは彼らの考えだと肺結核は伝染し、二百年前には狂人が締め殺されたように、患者はできることなら虐殺されるべきだということです。」(小松雄一郎訳、『ショパンの手紙』二三八—三三九頁。)

(一一三二) Allot, M. (ed.), *op. cit.*, p. 744. この編集者アロットは、キーツ作かどうか疑わしいとしているが、バーナードは弟ジョージが書き取ったもので、一八二四年十二月の祖母の死に対して書いたと云う。(Barnard, John ed., *The Complete Poems*, Note, p. 535.)

(一一三三) Shelley, *op. cit.*, pp. 430-431.
 シェリーの「アドネース」は、また、ロマン派詩人達の詩の要素を多く備えていることに気付くだろう。たとえば「青白い」(pale)という語が散見されるし、七、四九、五二連では「ローマ」を歌っている。一七連では小夜啼鳥ナキヤトリも登場している。またシェリーは、「詩の擁護」(*A Defence of Poetry*, 1821)の中で、「詩人とは、暗闇の中に坐って、自分の孤独を甘美な声で歌い慰める小夜啼鳥である。」と書いてゐる。

(一一三四) 「ソラに水で名を書かれし者横たわる」と「ソラに水に名を書かれし者横たわる」の両方の解釈可能。どちらも果敢なく哀れである。(斎藤勇, 前掲書, 一三九頁。)

(一一三五) Rollins (ed.), *op. cit.*, vol. I, p. 171 From J. Keats to Benjamin

Bailey.

(一一三六) *Ibid.*, p. 369. From J. Keats to C. W. Dilke.

(一一三七) Singer and Underwood, *op. cit.*, p. 108.

インドで鉱物性薬剤の中で最も尊重されたものは水銀で、肺病、皮膚病、天然痘などの治療に用いられ、「金属の王」と呼ばれた。諺に言う、「医師が、根や草の効能を知っていれば人間だ。水や火の効能を知っていれば魔だ。祈祷の力を知るものは予言者だ。水銀の力を知るものは神だ。」(小川政修『西洋医学史』三八—三九頁。)

(一一三八) Curry, James, *Examinations of the Prejudices commonly entertained against Mercury*. London, 1809, and *The Lancet*. (1823-24), II, 191. 193, 399. Both quoted by Gittings, *op. cit.*, p. 756.

(一一三九) *Ibid.*, p. 157.

(一一四〇) 詳しい論考は *Ibid.*, Appendix 3, 'Keats and Venereal Disease', pp. 446-450. を参照せよ。

(一一四一) 下剤。便秘が身体に悪い影響を及ぼすこと、それゆえ健康時も病気の時も、下剤を使用することは古代からの知恵だった。古代エジプトでは、月三回周期的に行われたが、つい近年まで、ほとんどすべての病気に対しての第一段階の治療は下剤を与えることだった。(Haggard, *op. cit.*, pp. 342-343.)

(一一四二) Ringer, *Therapeutics*, p. 199.

(一一四三) Flick, *op. cit.*, p. 147, 229-251.

一般参考文献表は「言語文化論集」第十巻第一号を参照のすべし。詳細な文献表は別に掲載する。